War Story

空薬莢

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦３０２０年。

世界は三つの派閥、一つの中立国に分かれ、争っていた。

第五次世界大戦と言われた同戦争は初め、旧ロシア連邦を初めとする東欧連邦国と、旧アメリカ合衆国を初めとするＵ．Ｓ．Ｏ．のいがみ合いが発端であり、西欧連合国は二国のいざこざに巻き込まれた形で国防の為に戦闘行動を取っていた筈だった。

しかし、そんな大義名分が忘れられるほど長く、この戦闘は続いている……。

本作は執筆：空薬莢、メカニック原案：アルファるふぁ、細かい調整他：空薬莢で制作する戦争モノ。

目次

用語解説 ―― 1
機体解説 ―― 7
MA／SA兵装 解説 ―― 24
Prolog ―― 51
Report I First Operating She's ―― 63
Report II The Innocent Girl? ―前編― 78
Report III Hunting Lucifer ―― 90
Report IV The Innocent Girl? ―後編― 106
Report V 〈Tri Stand Briefing〉 ―― 114
Report VI 〈Double Stand and Sturm&Защита〉 125
Report VII 〈The Angels Dies〉 ―― 143

用語解説

≫西欧連合国
旧欧州が悪化する経済難から合併してできた連合国家。
首都はベルリン。
多目的装甲はバランスに優れた汎用機を基本とし、モジュールによる局地特化型の方式を取っている。

≫東欧連邦
旧ロシア連邦を中心とする東欧、アジア諸国が合併した連邦国家。
首都はモスクワ。
多目的装甲の特徴は重装甲重火力。物量と火力によるゴリ押しが基本。

≫Ｕ．Ｓ．Ｏ．
正式名称、Ｕｎｉｔｅｄ　Ｓｔａｔｅｓ　ｏｆ　Ｏｃｅａｎ（海洋合衆国）。
旧Ｕ．Ｓ．Ａ．を母体とする南北両米が合併した国家。

首都はワシントンＤ．Ｃ．。
多目的装甲の特徴は高機動、紙装甲。装甲は飽くまで空力制御と風防程度の価値しかない。

≫西欧連合国軍　第４機械化歩兵中隊
西欧連合国軍内では中の上程度の実力を持つ多目的装甲中隊。
バランスに優れ、確実な戦果を身の上とするが、小隊間の関係に若干の難がある。

≫Ｕ．Ｓ．Ｏ．軍　第９独立機械化強襲小隊
通称《ルシファー小隊》。
激戦区に送られる部隊の中でも特に生存率が高く、高性能機を好んで使う傾向を持つ。
一方で、同小隊　隊長の戦闘スタイルから一般兵の間では忌み嫌われ、軍上層部からは頭痛の種とされている。

≫Ｍａｔｃｈ　Ａｒｍｏｒ
和名、多目的装甲。

全長７～９ｍ程度の有人搭乗型二足歩行機械。
各所に仕込まれた人工筋肉と機械の複合アクチュエータと、後述するマージを用いた《マージ・ジェネレータ》、《マージ・ブースタ》による高いポテンシャルを持つが、装甲厚は戦車より薄い。
また、地上でのマージ・ブースタ出力は機体を滞空させられる程ではなく、あくまで回避目的や高速移動に限られる。
≫Ｓｐｅｃｉａｌｉｚｅｄ　Ａｒｍｏｒ
和名、特化装甲。
多目的装甲の弱点である装甲の改善、或いは局地戦における絶対的な戦力として開発された有人搭乗型兵器。
開発の過程で、人型では無くなっている物が多い。

≫マージ（Ｍｅｒａｅ）
移住惑星探査の際に偶然発見された新物質。
２０Ａ以上の電流を加えると、周囲の有機無機問わず、物質と結合。原子核の結合を破壊し、発生した膨大なエネルギーをある程度保持したまま、増殖する性質を持つ。
マージ技術により、エネルギー分野は飛躍的に発展するが、有機無機問わず、あらゆ

る物質と結合、破壊する性質は当然の事ながら、人間に対して使用しても同じであり、マージと結合した人間は骨も残らない。

≫マージ・マテリアル（Ｍｅｒａｅ　Ｍａｔｅｒｉａｌ）

単にマテリアルとも呼ばれる。

マージが反応時に精製する結晶状の物質。

非常に高い強度を持ち、化学的に安定している。

２００Ｖ以上の電圧を加える事でマージ程では無いにしろ、膨大なエネルギーを放出する性質を持つ。

多目的装甲用火器の弾頭や燃料として用いられる。

≫マージ・ジェネレータ（Ｍｅｒａｅ　Ｇｅｎｅｒａｔｏｒ）

マージの性質を利用した発電機。

マージを反応させ、発生したエネルギーを各所に伝達、余剰分をコンデンサに蓄積する。

膨大なエネルギーを生み出せるものの、マージの特性上、廃棄が難しい。

≫マージ・ブースタ（Ｍｅｒａｅ　Ｂｏｏｓｔｅｒ）
マージの結合破壊作用により発生したマテリアルから取り出したエネルギーを推進力に変える装置。
ただし、この推進力は大気により大きく減衰（４割程度まで）する為、地上では事実上燃費が悪化する。

≫高密度複合マテリアル装甲（Ｈｉｇｈ　Ｄｅｎｓｉｔｙ　Ｍｅｒａｅ　Ａｒｍｏｒ）
略称、ＨＤＭＡ。
セラミックスを高密度に圧縮した金属結合マテリアルで挟んだ装甲材。
物理エネルギー、及び成形炸薬弾に体して強い耐性を持つが、マージ兵装には脆弱。

≫圧縮マテリアル弾（Ｃｏｍｐｒｅｓｓｅｄ　Ｍａｔｅｒｉａｌ　Ｂａｌｌ）
略称、ＣＭＢ。
マージ・マテリアルを高圧で圧縮、密度を高めた圧縮マージ・マテリアルを弾頭とする弾薬の事。
添加された物質によって硬度は変化するものの、総じて高硬度。
現行における銃砲弾の通常弾頭は全て圧縮マテリアル弾頭である。

≫熱光学兵装

マージを反応させた際に発生するエネルギーを熱エネルギーに変換し、放出する兵装。

従来の光学兵装同様に効率が悪く、実弾兵装に比べて射程と弾速に優れるものの、威力の減衰が大きい。

その為、長射程でありながら、実質的にはゼロ距離射撃用の溶断トーチ的運用が推奨される。

機体解説

《西欧連合国機》

》ＳＥＩ　ＭＴ１０Ａ３《ノート》

メーカー…Ｓｏｕｔｈ　Ｅｕｒｏ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ

全高…８．２ｍ

空載時基本重量…４８５．８ｔ

装甲厚…最大８０㎜

最高速度（大気圏内）…１８５㎞／ｈ

連続稼働時間…最大１２０時間

搭乗人数…１名

基本武装…《ＥＡ　ＬＡ５Ａ１　３５㎜突撃砲》ｘ１

《ＥＡ　ＡＲ３Ａ２　２１０㎜無反動砲》ｘ１

《ＥＡ　ＣＮ０１Ａ１　カーボンナイフ》ｘ１

西欧連合国軍制式採用の多目的装甲。

バランスに優れており、モジュール化された追加装備によって様々な用途に対応でき

る。

補足…原案：空薬莢

≫ＳＥＩ　ＭＴ１０Ａ３―Ａ《ノート》近接仕様

全高…８．２ｍ

空載時基本重量…４５１．５ｔ

装甲厚…最大７０㎜

最高速度（大気圏内）…２１０㎞／ｈ

連続稼働時間…最大１１６時間

搭乗人数…１名

基本武装…《ＥＡ　ＡＳ０４―Ａ　１５０㎜散弾砲》ｘ１

《ＥＡ　ＬＡ５Ａ１―Ａ　３５㎜突撃砲》ｘ１

《ＥＡ　ＣＮ０１Ａ１　カーボンナイフ》ｘ２

ノートに強襲作戦用モジュールを装備した機体。

装甲の一部がオミットされ、脚部に姿勢制御兼格闘用のアンカースパイクの追加、ブースタの大型化により、機動性が向上している。

≫ＳＥＩ　ＭＴ１０Ａ３―Ｓ《ノート》砲戦仕様

全高…８．５ｍ
空載時基本重量…５３５ｔ
装甲厚…最大９０㎜
最高速度（大気圏内）…１２０㎞／ｈ
連続稼働時間…最大１４４時間
搭乗数…１名
基本武装…《ＢＩ　ＬＲＣ２Ａ２　１８０㎜多目的砲》ｘ１
《ＢＩ　ＬＲ０５Ａ４　５０㎜狙撃砲》ｘ１
《ＥＡ　ＣＮ０１Ａ１　カーボンナイフ》ｘ１
《ＢＩ　ＬＳ００　大型シールド》ｘ２

ノートに砲撃支援用モジュールを装備した機体。
複合装甲が重厚な物に取り換えられ、肩部も可動式大型装甲板付きの物に換装されている。
機動力が低下している為、単体での運用は困難。

《Ｕ．Ｓ．Ｏ．機》
》Ｎ―Ｄｅｔ０５《アサルト・フィッシュ》

メーカー…Ｎｏｒｔｈ　Ｄｅｔｒｏｉｔ　Ｆａｃｔｏｒｙ
全高…７．９ｍ
空載時基本重量…３９８．７ｔ
装甲厚…最大５０㎜
最高速度（大気圏内）…４００ｋｍ／ｈ
連続稼働時間…最大１２０時間
搭乗人数…１名
基本武装…《ＫＡ　ＭＧ―０２　３０㎜腕部一体型多目的機関砲》ｘ２
《ＷＡ　ＭＳＬ―０３　１５０㎜多連装ミサイルランチャー》ｘ２
Ｕ．Ｓ．Ｏ．軍制式採用多目的装甲の一つ。
腕部一体型のカーボンブレイド付き機関砲を持ち、速度に優れるものの、装甲厚が非常に薄い。
補足…原案：空薬莢
》Ｎ―Ｄａｔ０５―Ａ《アバランチ・クラブ》
メーカー…Ｎｏｒｔｈ　Ｄｅｔｒｏｉｔ　Ｆａｃｔｏｒｙ
全高…８．１ｍ
空載時基本重量…３６８．７ｔ

装甲厚…最大４６㎜
最高速度（大気圏内）…４３０km／h
連続稼働時間…最大９６時間
搭乗人数…１名
基本武装…《ＷＡ　ＭＡＣ０４　腕部一体型３５㎜突撃砲》ｘ４
《Ｎ―Ｄａｔ０５》の改修機。
背部ハードポイントを廃止、腕部一体型火器の強化、増強が施されている。
また、高重量物の廃止により若干ではあるが、機動性が向上している。
補足…原案：空薬莢

》Ｓ―Ｄｅｔ０７《ブラスト・シェル》
メーカー…Ｓｏｕｔｈ　Ｄｅｔｒｏｉｔ　Ｆａｃｔｏｒｙ
全高…７．８ｍ
空載時基本重量…４０７．５ｔ
装甲厚…最大５２㎜
最高速度（大気圏内）…３７０km／h
連続稼働時間…最大１４４時間

搭乗人数…１名
基本武装…《ＷＡ　ＭＡＣ０４　腕部一体型３５㎜突撃砲》ｘ１
《ＷＡ　ＣＢ００　カーボンナイフ》ｘ１
Ｕ．Ｓ．Ｏ．軍制式採用多目的装甲の一つ。
汎用性とコストの両立を図る意味で、左腕がマニュピュレータ状になっている。
しかし、装甲厚は薄い。
補足…原案：空薬莢

Ｓ―Ｄｅｔ０６《ブロウ・フィッシュ》
メーカー…Ｓｏｕｔｈ　Ｄｅｔｒｏｉｔ　Ｆａｃｔｏｒｙ
全高…８．５ｍ
空載時基本重量…４７５ｔ
装甲厚…最大５５㎜
最高速度（大気圏内）…２１０㎞／ｈ
連続稼働時間…最大１０８時間
搭乗人数…１名
基本武装…《ＷＡ　ＡＭＣ０５Ｃ　６５㎜多目的速射砲》ｘ１

《ＷＡ　ＭＳＬ―０３　１５０㎜多連装ミサイルランチャー》ｘ２

Ｕ．Ｓ．Ｏ．軍重装後方支援機。

胴体上部一体型６５㎜多目的速射砲と連装ＭＳＬによる火力支援を念頭に置かれた機体。

同国多目的装甲としては、機動性が低い。

補足…原案：空薬莢

≫Ｓ―Ｄａｔ０６―Ｃ《アーチャー・フィッシュ》

メーカー…Ｓｏｕｔｈ　Ｄｅｔｒｏｉｔ　Ｆａｃｔｏｒｙ

全高…８．３ｍ

空載時基本重量…４４５ｔ

装甲厚…最大５０㎜

最高速度（大気圏内）…３００㎞／ｈ

搭乗人数…１名

連続稼働時間…最大１２０時間

基本武装…《ＷＡ　ＡＭＣ０５Ｃ　６５㎜多目的速射砲》ｘ１

《ＷＡ　ＭＡＣ０４—Ｃ　腕部一体型３５㎜突撃砲》ｘ２
Ｓ—Ｄａｔ０６の改修機。
腕部を３５㎜突撃砲に換装し、機体重量を抑えた結果、機動性が改善されている。
補足…原案：空薬莢

》Ｃ—Ｓｉ００
メーカー…Ｃｅｎｔｒａｌ　Ｓｉｌｉｃｏｎ　Ｆａｃｔｏｒｙ
全高…８．０ｍ
空載時基本重量…４００ｔ
装甲厚…最大４７．５㎜
最高速度（大気圏内）…５１０㎞／ｈ
連続稼働時間…最大７２時間
搭乗人数…１名
基本武装…《ＷＡ　ＡＣ１０—Ｄ　４０㎜突撃砲》ｘ２
《ＷＡ　ＣＢ００　カーボンナイフ》ｘ２
Ｕ．Ｓ．Ｏ．軍高機動試作機。
脚部、背部、腰部側面に高出力ブースタを持ち、高い機動性を発揮する。

しかし、《Ｎ―Ｄｅｔ０５》以上に装甲が薄く、ジェネレータが低出力である事により、持久力が低い。

補足…原案…アルファるふぁ

》Ｃ―Ｓｉ００―Ａ《ブルーギル》

メーカー…Ｃｅｎｔｒａｌ　Ｓｉｌｉｃｏｎ　Ｆａｃｔｏｒｙ

全高…８．７ｍ

空載時基本重量…３６２．５ｔ

装甲厚…最大４０㎜

最高速度（大気圏内）…５１０㎞／ｈ

連続稼働時間…最大４８時間

搭乗人数…１名

基本武装…《ＫＡ　ＡＢ００　フォールディングブレイド》ｘ２

《ＫＡ　ＡＢ０１　マージダガー》ｘ８

《ＷＡ　ＭＣ１０―Ｃ　４０㎜短機関砲》ｘ２

《Ｃ―Ｓｉ００》の近接特化仕様。

装甲の削減と増槽、ブースタ一体型脚部に換装された為、機動性と持久力が向上。
加えて、レーダー各種に対応したステルスも搭載。
しかし、搭乗者の希望により取り付けられた高重量の展開型ブレードにより、機動性が相殺されている。
補足…原案：アルファるふぁ

≫Ｃ―Ｓｉ００―Ｃ《アドバンスド・シャーク》
メーカー…Ｃｅｎｔｒａｌ　Ｓｉｌｉｃｏｎ　Ｆａｃｔｏｒｙ
全高…８．２ｍ
空載時基本重量…３８２．５ｔ
装甲厚…最大４３㎜
最高速度（大気圏内）…６２０㎞／ｈ
連続稼働時間…最大７２時間
搭乗人数…１名
基本武装…《ＷＡ　ＡＣ１０―Ｄ　４０㎜突撃砲》ｘ１
《ＷＡ　ＲＫ０５―Ｃ　２４０㎜ロケットランチャー》ｘ１

《ＷＡ　ＳＭ０８—Ｓ　１８０㎜多連装ミサイルランチャー》ｘ２

《ＷＡ　ＣＢ００　カーボンナイフ》ｘ２

Ｕ．Ｓ．Ｏ．軍高機動試作機（ルシファー小隊モデル）。

ルシファー小隊隊長仕様に改造が施された本機は脚部を増倉、ブースター体型に換装。ジェネレータも高出力の物に載せ変えた為、より機動性と持久力が向上している。

一方で肥大化した重量の為に、装甲が薄くなっている。

それでも、同部隊隊長の戦闘スタイル故に、機体への負荷は大きい。

補足…原案：アルファるふぁ

《Ｃ—Ｓｉ０１

メーカー…Ｃｅｎｔｒａｌ　Ｓｉｌｉｃｏｎ　Ｆａｃｔｏｒｙ

全高…８．２ｍ

空載時基本重量…３９７．５ｔ

装甲厚…最大４８㎜

最高速度…５５０㎞／ｈ

連続稼働時間…９６時間

搭乗人数…１名
基本武装…《ＷＡ　ＳＮ１７　５５㎜狙撃砲》ｘ１
Ｕ．Ｓ．Ｏ．軍長距離狙撃型試作機。
高性能なＦＣＳとセンサーが搭載され、長距離砲撃能力に優れる。
一方で、後方支援機としては稼働時間が短い。
補足…原案：アルファるふぁ

》Ｃ―Ｓｉ０１―Ｃ《エンハンスド・ドルフィン》
メーカー…Ｃｅｎｔｒａｌ　Ｓｉｌｉｃｏｎ　Ｆａｃｔｏｒｙ
全高…８．３ｍ
空載時基本重量…４０３．５ｔ
装甲厚…最大４５㎜
最高速度…５００㎞／ｈ
連続稼働時間…７２時間
搭乗人数…１名
基本武装…《ＷＡ　ＳＮ１７　５５㎜狙撃砲》ｘ１
《ＷＡ　ＳＣ―Ｌ　９０㎜多目的砲》ｘ１

《ＷＡ　ＳＧ１５　１２０㎜全自動散弾砲》ｘ１

Ｃ―Ｓｉ０１の狙撃特化仕様。

ルシファー小隊副隊長仕様に改造が施された本機は、頭部にサブＦＣＳを増設、レーダー／センサーステルス処理が為された事により、長距離砲戦能力が強化されている。

補足…原案：アルファるふぁ

《東欧連邦国機》

ＤＩ　Ｔ７０《プレート》

メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ

全高…７．７ｍ

空載時基本重量…４１１．１ｔ

装甲厚…最大３０㎜

最高速度（大気圏内）…１９５㎞／ｈ

連続稼働時間…最大７２時間

搭乗人数…１名

基本武装…《ＤＩ　ＡＧ７０　４０㎜突撃砲》ｘ１

東欧連邦国初の多目的装甲。

実験機に装甲と武装を追加したに過ぎず、装甲車にも劣る装甲は同国の思想に全くそぐわない事から、開発から僅か2年で練習機となった。
皿のように薄い頭は当時の技術的理由による。
補足…原案：アルファるふぁ

》ＤＩ　Ｔ０１Ｄ《バレット》
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全高…８．１ｍ
空載時基本重量…５０９．６ｔ
装甲厚…最大９５㎜
最高速度（大気圏）…１４５㎞／ｈ
連続稼働時間…最大１４４時間
搭乗人数…１名
基本武装…《ＤＩ　ＡＧ７５　４５㎜突撃砲》ｘ１
《ＤＩ　ＦＭ７４　１８０㎜多連装ミサイルランチャーｘ２》
《ＤＩ　ＡＮ７１　カーボンナイフ》ｘ１
東欧連邦国軍制式採用多目的装甲。

それなりの装甲を持ちながら、脚部を履帯にする事で機動性の低下を軽減している。
肩に追加装甲を装備しているが、頭部と背部の装甲が薄い。
補足…原案：アルファるふぁ

≫ＤＩ　Ｔ０５Ａ《モーター》
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全高…８．１ｍ
空載時基本重量…５３１．７ｔ
装甲厚…最大８５㎜
最高速度（大気圏内）…１３０㎞／ｈ
連続稼働時間…最大１７０時間
搭乗人数…１名
基本武装…《ＤＩ　ＳＤ９４―Ｌ　６５㎜狙撃砲》ｘ１
《ＤＩ　ＳＣ９５―Ｆ　２７０㎜多目的砲》ｘ１
《ＤＩ　ＡＮ７１　カーボンナイフ》ｘ１
東欧連邦軍　後方支援用多目的装甲。
各種センサーを内蔵した頭部は機能性の点からキューポラのようになっている。

偵察、狙撃用である為、長時間の稼働が可能。
補足…原案：アルファるふぁ

》ＤＩ　Ｔ０２Ａ《ギガース》
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全高…８．９ｍ
空載時基本重量…７３９．１ｔ
装甲厚…最大１８０㎜
最高速度（大気圏内）…６０㎞／ｈ
連続稼働時間…最大９６時間
搭乗人数…１名
基本武装…《ＤＩ　ＡＧ８０　５０㎜突撃砲》ｘ２
《ＤＩ　ＦＣ０２　２５０㎜連装多目的砲》ｘ１
《ＤＩ　ＳＭＵ００　８０㎜多連装ロケットポッド》ｘ２
東欧連邦軍　重多目的装甲。
限界まで装甲を搭載した事により、高出力ジェネレータを積んでいるとはいえ、機動性が非常に劣悪。

開発依頼を出したある高級将校の要望により、肩部内蔵型ロケットポッドが装備されており、この部分の装甲は薄い。

また、マニュピュレータ強度が非常に高い本機は格闘用のカーボンナイフを装備していない。

補足…原案：アルファるふぁ

ＭＡ／ＳＡ兵装　解説

《Ｓｕｂ　Ｍａｃｈｉｎｅ　Ｃａｎｎｏｎ／Ｍａｃｈｉｎｅ　Ｃａｎｎｏｎ／Ａｓｓａｕｌｔ　Ｃａｎｎｏｎ》

速射性と弾数のバランスが取れた多目的装甲の主兵装。

マニュピュレータで保持する携行型と、腕部一体型の二種が存在し、前者は整備性が高く、低価格だがマガジンあたりの装填弾数が少ない。後者はマガジンあたりの装填弾数が多く、機体を比較的軽量にできるが、整備性が悪く、高価な上に総合的な汎用性に劣る。

尚、細分化すると――

威力と射程に優れる突撃砲。

取り回しに優れるが、精度の低い短機関砲。

威力と速射性に優れるが、取り回しが劣悪な機関砲。

の三種類がある。

》ＥＡ　ＬＡ５Ａ１

メーカー…Ｅｕｒｏ　Ａｒｍａｍｅｎｔ
全長…３．２ｍ
重量…３．６ｔ（弾薬未装填）
砲身長…１．５ｍ
使用弾薬…３５ｘ１００㎜ＣＭＢ
作動機構…ショートストローク・ガスピストン
初速…９２０ｍ／ｓ
マガジン弾数…４０／６０（ロングＤカラムマガジン）
有効射程…１６００ｍ
ＥＡ社製突撃砲。
中口径、高精度。加えて、信頼性も高い。

≫ＥＡ　ＬＡ５Ａ１—Ａ
全長…４．２ｍ
重量…４．１ｔ（弾薬未装填）
砲身長…１．５ｍ
使用弾薬…３５ｘ１００㎜ＣＭＢ

作動機構…ショートストローク・ガスピストン
初速…９２０ｍ／ｓ
マガジン弾数…４０／６０（ロングＤカラムマガジン）
有効射程…１６００ｍ
ＬＡ５Ａ１の仕様の一つ。
砲身下部にカーボン製のブレードを装着した物。
重量増加により、反動も低下している。

≫ＫＡ　ＭＧ―０２
メーカー…Ｋｎｏｃｋｉｎｇ　Ａｒｍａｍｅｎｔ
全長…３．５ｍ
重量…１５．３ｔ（腕部全体重量、弾薬未装填時）
砲身長…１．７ｍ
使用弾薬…３０ｘ７０㎜ＣＭＢ
作動機構…シンプル・ブローバック
初速…９２０ｍ／ｓ
マガジン弾数…６０ｘ２（二連マガジン式）／３００（ドラムマガジン式）

有効射程…１２００ｍ
ＫＡ社製腕部一体型多目的短機関砲。
腕部一体型の方式により、軽量化に成功しているものの、近接戦闘能力が低下する。
申しわけ程度に取り付けられた打突式銃剣は扱いが難しく、それでいて威力も低い。

≫ＷＡ　ＭＡＣ０４
メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ
全長…３．８ｍ
重量…２１．７ｔ（腕部全体重量、弾薬未装填時）
砲身長…２．０ｍ
使用弾薬…３５ｘ８５㎜ＣＭＢ／８５ｘ１００㎜ＣＭＢ／ＨＥ
作動機構…シンプル・ブローバック／同左
初速…９１０ｍ／ｓ／４５０ｍ／ｓ
マガジン弾数…５０ｘ２（二連マガジン）／５
有効射程…１５００ｍ／９００ｍ
ＷＡ社製腕部一体型突撃砲。
砲身下部に８５㎜擲弾射出器が取り付けられ、総合的な打撃力が向上している。

が、近接戦闘能力が低い事に変わりはない。

≫ＷＡ　ＡＣ１０―Ｄ
メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ
全長…３．２ｍ
重量…２．４５ｔ（弾薬未装填時）
砲身長…１．１ｍ
使用弾薬…４０ｘ９０㎜ＣＭＢ
作動機構…ショートストローク・ガスピストン
初速…９７０ｍ／ｓ
マガジン弾数…３０
有効射程…１７００ｍ
ＷＡ社製突撃砲。
短砲身、軽量である為、反動制御に難がある。

≫ＷＡ　ＭＣ１０―Ｃ
メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ

全長…２．２ｍ
重量…１．４５ｔ（弾薬未装填時）
砲身長…０．７ｍ
使用弾薬…４０ｘ５５㎜ＣＭＢ
作動機構…ショートストローク・ガスピストン
初速…６７０ｍ／ｓ
マガジン弾数…４０
有効射程…７００ｍ
ＷＡ社製短機関砲。
《ＷＡ　ＡＣ１０－Ｄ》の設計を流用した物であり、反動制御に難がある。

》ＤＩ　ＡＧ７０
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ａｒｍａｍｅｎｔ
全長…３．５ｍ
重量…４．５５ｔ
砲身長…１．９７ｍ
使用弾薬…４０ｘ８０㎜ＣＭＢ

作動機構…ロングストローク・ガスピストン
初速…９１５ｍ／ｓ
マガジン弾数…２０
有効射程…１７００ｍ
ＤＡ社製突撃砲。
他国の突撃砲に比べ、大口径である為、打撃力に優れるものの、速射速度は低い。
また、信頼性が高い。

≫ＤＩ　ＡＧ７５
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ａｒｍａｍｅｎｔ
全長…２．８ｍ
重量…４．６５ｔ（弾薬未装填）
砲身長…１．３ｍ
使用弾薬…４５ｘ９９㎜ＣＭＢ
作動機構…ロングストローク・ガスピストン
初速…９３０ｍ／ｓ
マガジン弾数…３０

有効射程…１７００ｍ
ＤＡ社製突撃砲。
《ＡＧ７０》の後継。
大口径化により打撃力の向上。

ＤＩ　ＡＧ８０
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全長…３．１ｍ
重量…５．２５ｔ（弾薬未装填時）
砲身長…１．５ｍ
使用弾薬…５０ｘ１０５㎜ＣＭＢ
作動機構…ショートストローク・ガスピストン
初速…９１０ｍ／ｓ
マガジン弾数…３５
有効射程…１８００ｍ
ＤＩ社製突撃砲。
５０㎜径の弾薬を用い、破壊力に優れるものの、フルオートでの精度に難がある。

《Ｓｈｏｔ　Ｃａｎｎｏｎ》
小口径の球形弾を放射状に撃ち出す近接用兵装。
弾種にもよるが、装甲目標に対する効果は薄く、主に対人用。
だが、脆弱部位を狙う事出来れば、装甲目標相手にも充分な損害を与えられる。

》ＥＡ　ＡＳ０４
メーカー…Ｅｕｒｏ　Ａｒｍａｍｅｎｔ
全長…２．８ｍ
重量…３．４ｔ（弾薬未装填）
砲身長…１．５ｍ
使用弾薬…１５０㎜ショットシェル（２０㎜ＣＭＢｘ８）
作動機構…シンプル・ブローバック
マガジン弾数…１０
有効射程…３００ｍ
ＥＡ社製半自動散弾砲。
近接戦闘、牽制で威力を発揮する。

≫ＥＡ　ＡＳ０４—Ａ
メーカー…Ｅｕｒｏ　Ａｒｍａｍｅｎｔ
全長…３．８ｍ
重量…４．３ｔ（弾薬未装填）
砲身長…１．５ｍ
使用弾薬…１５０㎜ショットシェル（２０㎜ＣＭＢｘ８）
作動機構…シンプル・ブローバック
マガジン弾数…１０
有効射程…３００ｍ
ＥＡ　ＡＳ０４の近接仕様の一つ。
砲身下部にカーボン製のブレードを追加した物。

≫ＷＡ　ＳＧ１５
メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ
全長…３．１ｍ
重量…３．３ｔ（弾薬未装填）

砲身長…１．０ｍ
使用弾薬…１２０㎜ショットシェル（２０㎜ＣＭＢｘ５）
作動機構…シンプル・ブローバック
マガジン弾数…２０
有効射程…２００ｍ
ＷＡ社製自動式散弾砲。
マガジン弾数が比較的多く、継続的力は高い。
また、比較的軽量。

《Ｓｎｉｐｅｒ　Ｃａｎｎｏｎ》
単発威力に優れる長射程兵装。
速射性は低く、取り回しも悪い為、後方支援用である。
また、同兵装使用時は強制的に自動照準機能が停止し、手動照準となる。

≫ＢＩ　ＬＲ０５Ａ４
メーカー…Ｂａｒｒｅｌ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全長…５．２ｍ

重量…８．３ｔ（弾薬未装填）
砲身長…２．５ｍ
使用弾薬…５０ｘ１５０㎜（ＣＭＢ／ＣＣＭＡＰ）
作動機構…ローラーディレート・ブローバック
初速…１１００ｍ／ｓ
マガジン弾数…５
有効射程…３８００ｍ
ＢＩ社製半自動式狙撃砲。
高精度だが作動機構上、有効射程が短い。
速射性が高い事から、撃ち漏らしの修正が容易。

≫ＷＡ　ＳＮ１７
メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ
全長…５．１ｍ
重量…８．１ｔ（弾薬未装填）
砲身長…３．０ｍ
使用弾薬…５５ｘ１７０㎜ＣＭＢ—ＡＰ

作動機構…ショートリコイル
初速…１２００ｍ／ｓ
マガジン弾数…８
有効射程…５０００ｍ
ＷＡ社製狙撃砲。
他国の狙撃砲に比べると、比較的軽量であるが、それ以外にこれと言った特徴は無く、狙撃砲自体の性能は平均的。
全長は長い為、取り回しは狙撃砲の例に漏れず、悪い。

≫ＤＩ　ＳＤ９４―Ｌ
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全長…５．７ｍ
重量…１２．１ｔ（弾薬未装填）
砲身長…３．４ｍ
使用弾薬…６５ｘ１８０㎜ＣＭＢ―ＡＰ
作動機構…ロングリコイル
初速…１１００ｍ／ｓ

マガジン弾数…８
有効射程…４７００ｍ
ＤＩ社製自動式狙撃砲。
取り回しが悪いものの、同クラスの狙撃砲に比べて破壊力が大きい。

《Ｒｏｃｋｅｔ　Ｌａｕｎｃｈｅｒ》
対装甲目標用兵装。
大型の成形炸薬弾を使用する。
取り回しが悪く、重い。
また初速も遅く、対戦車用という趣が強い。

》ＥＡ　ＡＲ３Ａ２
メーカー…Ｅｕｒｏ　Ａｒｍａｍｅｎｔ
全長…３．１ｍ
重量…４．８ｔ（弾薬未装填）
使用弾薬…２１０㎜ＣＭＢ―ＨＥＡＴ　ロケット
初速…４２０ｍ／ｓ

マガジン弾数…６
有効射程…８００ｍ
ＥＡ社製ロケットランチャー。
比較的多弾数。
しかし、重量がやや嵩む。

≫ＷＡ　ＲＫ０５―Ｃ
メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ
全長…２．８ｍ
重量…６．２ｔ（弾薬未装填時）
使用弾薬…２４０㎜ＣＭＢ―ＨＥＡＴロケット
初速…４００ｍ／ｓ
マガジン弾数…３
有効射程…７５０ｍ
ＷＡ社製ロケットランチャー。
回転式弾倉を備え、耐久性に優れる。
一方で、装填に手間が掛かるという欠点もある。

≫ＤＩ　ＳＭＵ００
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全長…２．２ｍ
重量…４．２ｔ（弾薬未装填時）
使用弾薬…８０㎜ＣＭＢ―ＨＥＡＴロケット
初速…３８０ｍ／ｓ
マガジン弾数…１２
有効射程…５００ｍ
ＤＩ社製多連装ロケットポッド。
一発当たりの破壊力は低いものの、装填弾数が多く、数で補う扱い方が基本。

《Ｌａｒｇｅ　Ｍａｔｃｈ　Ｃａｎｎｏｎ》
多種の弾薬を用いる火力支援用兵装。
非常に取り回しが悪く、自動照準機能が使えない。
一発当たりの破壊力に優れる汎用大型砲、速射性の高い汎用速射砲、精度と貫徹力に優れる大型狙撃砲の三種が存在し、例外を除いて全種に弾倉交換用の補助アームが標準

装備されている。
同兵装使用時は強制的に自動照準機能が停止し、手動照準となる。

≫ＢＩ　ＬＲＣ２Ａ２
メーカー…Ｂａｒｒｅｌ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全長…６．７ｍ／２．７ｍ
重量…３２．７ｔ（弾薬未装填）
砲身長…４．０ｍ
使用弾薬…２１０ｘ４５０㎜（ＣＭＢ―ＨＥ／ＣＭＢ―ＡＰＦＳＤＳ／ＣＭＨＥ）
作動機構…シンプル・ブローバック
初速…１６００ｍ／ｓ
マガジン弾数…８
有効射程…１００００ｍ
ＢＩ社製汎用大型砲。
信頼性が高いが、やや高価。

≫ＷＡ　ＡＭＣ０５Ｃ

メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ
全長…６．３ｍ／３．１ｍ
重量…２３．７ｔ（弾薬未装填）
砲身長…３．２ｍ
使用弾薬…６５ｘ１４０㎜（ＣＭＢ―ＨＥ／ＣＭＨＥ）
作動機構…ショートリコイル
初速…１１４０ｍ／ｓ
マガジン弾数…５０
有効射程…６０００ｍ
ＷＡ社製汎用速射砲。
マガジン弾数が多く、広範囲に散布砲撃をする分には、都合が良い。
が、小口径であるため、一発当たりの面制圧能力は低い。

≫ＷＡ　ＳＣ―Ｌ
メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ
全長…６．８ｍ／３．３ｍ
重量…２１．７ｔ（弾薬未装填）

砲身長…３．５ｍ
使用弾薬…９０ｘ１８０㎜（ＣＭＢ―ＡＰＦＳＤＳ／ＣＭＨＥ）
作動機構…ロングリコイル
初速…１４４０ｍ／ｓ
マガジン弾数…５
有効射程…８０００ｍ
ＷＡ社製大型狙撃砲。
精密砲撃に優れるものの取り回しが悪く、装填弾数も少ない。
また、軽量化の為に弾倉交換用補助アームがオミットされた関係上、マガジン交換が非常に面倒である。

≫ＤＩ　ＳＣ９５―Ｆ
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ａｒｍａｍｅｎｔ
全長…７．４５ｍ／３．２ｍ
重量…３１．５５ｔ
砲身長…４．２５ｍ
使用弾薬…２７０ｘ５２０㎜（ＣＭＢ―ＨＥ／ＣＭＢ―ＡＰＦＳＤＳ）

作動機構…ロングストローク・ガスピストン
初速…１５５０ｍ／ｓ
マガジン弾数…３
有効射程…９２００ｍ
ＤＩ社製汎用大型砲。
大口径故に高火力だが、装填弾数が少なく、取り回しも悪い。

≫ＤＩ　ＦＣ０２
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ａｒｍａｍｅｎｔ
全長…６．２５ｍ／３．２５ｍ
重量…３８．９ｔ
砲身長…４．０ｍ
使用弾薬…２５０ｘ５００㎜（ＣＭＢ－ＨＥ）
作動機構…ショートストローク・ガスピストン
初速…１５００ｍ／ｓ
マガジン弾数…１０（５）
有効射程…８６００ｍ

ＤＩ社製連装汎用砲。
連装式であるが故に、汎用砲としては速射性が高く、面制圧火力は高い。

《Ｍｉｓｓｉｌｅ　Ｌａｕｎｃｈｅｒ》
誘導装置と成形炸薬弾頭を組み合わせた兵装。
誘導対象を捕捉するまで、発射出来ない上に、重量が嵩む。
一般的には、コスト面から赤外線を利用する光波ホーミング誘導方式が使われる。

≫ＷＡ　ＭＳＬ―０３
メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ
全長…１．７ｍ
重量…２１．９ｔ（弾薬未装填時）
使用弾薬…１５０㎜ＣＭＢ―ＨＥＡＴミサイル
誘導方式…光波ホーミング式（赤外線）
装填弾数…８
最大水平射程…５４００ｍ
最大上昇高度…２１００ｍ

ＷＡ社製多連装ミサイルランチャー。
制圧力は専用車両に遠く及ばないものの、比較的軽便な誘導兵器として、利用価値はある。

≫ＷＡ　ＳＭ０８―Ｓ
メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ
全長…１．８５ｍ
重量…２９．５ｔ（弾薬未装填時）
使用弾薬…１８０㎜ＣＭＢ―ＨＥＡＴミサイル
誘導法式…光波ホーミング式（赤外線）
装填弾数…７
最大水平射程…７５００ｍ
最大到達高度…２３００ｍ
ＷＡ社製多連装ミサイルランチャー。
より大口径のミサイルを搭載し、火力を上げているものの、やはり専用車両には遠く及ばない。
新たに、トップアタック式の誘導法式を採用している。

≫ＤＩ　ＦＭ７４
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全長…２．０５ｍ
重量…３４．５ｔ（弾薬未装填時）
使用弾薬…１８０㎜ＣＭＢ―ＨＥＡＴミサイル
誘導法式…光波ホーミング式（赤外線）
装填弾数…４
最大水平射程…３０００ｍ
最大到達高度…１３００ｍ
ＤＩ社製１８０㎜多連装ミサイルランチャー。
装填弾数が少なく、重量もやや重い。

《Ｔｈｅｒｍａｌ　Ｗｅａｐｏｎ》
マージの結合増殖作用を利用し、高温の熱線を放射する特殊兵装。
弾速に優れるものの、熱エネルギー兵装故に威力減衰が大きく、近距離で当てなければ装甲目標に対する効果は薄い。

※現在未登場

《Ｂｌａｄｅ／Ｋｎｉｆｅ》

近接格闘用兵装。

戦闘で使われる事は少なく、作業用ツールとしての側面が強いナイフ、純近接格闘用の大型ブレード等が存在する。

≫ＥＡ　ＣＮ０１Ａｌ

メーカー…Ｅｕｒｏ　Ａｒｍａｍｅｎｔ

全長…１．８ｍ

重量…１．３ｔ

刃渡り…１．０ｍ

ＥＡ社製カーボンナイフ。

他国のナイフに比べ、刃渡りが短めである。

≫ＷＡ　ＣＢ００

メーカー…Ｗｉｌｄ　Ａｒｍｓ

全長…１．９５ｍ

重量…１．１ｔ
刃渡り…１．２５ｍ
ＷＡ社製カーボンナイフ。
切断よりも刺突に特化しており、耐久性に難がある。

≫ＫＡ　ＡＢ００
メーカー…Ｋｎｏｃｋｉｎｇ　Ａｒｍａｍｅｎｔ
全長…４．５ｍ／１．８ｍ
重量…１２．８ｔ
刃渡り…２．７ｍ
ＫＡ社製大型フォールディングカーボンブレイド。
取り回しが悪く、近接戦闘で優位を保てるというわけでもない。
軽量機の相対的な打撃力強化が目的。

≫ＤＩ　ＡＮ７１
メーカー…Ｄｅｓｓｅｒｔ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全長…２．６ｍ

重量…２．１ｔ
刃渡り…１．７５ｍ
ＤＩ社製カーボンナイフ。
他国のカーボンナイフに比べ、耐久性に優れ、大型である。

《Ｓｈｉｅｌｄ》
防護兵装。
基本的に装甲板であり、場合によってはデッドウェイトになりかねない。

≫ＢＩ　ＬＳ００
メーカー…Ｂａｒｒｅｌ　Ｉｎｄｕｓｔｒｙ
全長…３．０ｍ
全幅…１．１ｍ
重量…１４．９ｔ
装甲厚…１６０㎜
装甲方式…複合装甲
肩部外装式の大型装甲板。

標準的な狙撃砲クラスまでの砲弾に対応している。

《Ｏｔｈｅｒ》

特殊兵装群。

汎用性が無い物が大半である。

≫ＫＡ　ＡＢ０１

メーカー…Ｋｎｏｃｋｉｎｇ　Ａｒｍａｍｅｎｔ

全長…１．９ｍ

重量…１．８ｔ

刃渡り…１．０ｍ

不活性マージ充填の高密度圧縮マテリアル製刀身の短剣。

無線式信管を備え、小型のＣＭＨＥ弾頭としての利用も可能。

Prolog

――西暦２８９０年。

増え過ぎた人口に対する解決策として、火星や月が地球化（テラ・フォーミング）される中、偶然ある物質が発見された。

その物質は電流を加える事で、無機有機問わず結合、増殖すると共に、莫大なエネルギーを放出する性質を持っていた。

また、この時に精製される結晶状の物質すらも、一定以上の電圧を加える事で同様にエネルギーを放出する性質があった為、外惑星移住と共に問題に挙がっていたエネルギー不足は同物質によって、解決に向かう。

しかし、優位性だけに着目して使用された為、人類はこの物質が非常に危険な物だとは気付かなかった。

後に性質から《マージ》と名付けられた同物質の性質は、結合した物質の原始構造を破壊し、エネルギーを取り出しつつ、似た物質として増殖するものだったのだ。

そんな事などいざ知らず、マージを多用とした人類はある時、悲劇を起こす。

制御を誤った《マージ》が流出し、アフリカ大陸の8割が更地と化すという、大災害を。

この人災により、《マージ》の制御技術と危険性の研究が活性化した一方で、それまで然程積極的ではなかった、外惑星移住が急速に広まり、人類総人口の実に4割にあたる60億人が外惑星へと移住した。

地球に残ったのは、宇宙と外惑星に不安を拭いきれない臆病者と、今ある権力を失いたくない国の上層部達。そして、貧困に喘ぐ人々。

やがて、国家は再編され、地球は四つの国に分割された。

――旧欧州を統合した西欧連合国。

――旧ロシア連邦とアジア諸国が統合した東欧連邦。

――旧アメリカ合衆国を主軸として、北米と南米が同盟を結び、生まれたU・S・O・

――中立の立場を貫き通す、日本国。

これら四国家は初めこそ、国連によって纏められていたが、何十年と時が過ぎた西暦2960年、平和は砕け散る。

数世紀前から続く、旧ロシア連邦と旧アメリカ合衆国の対立が表面化してしまった為だ。

開戦の火蓋を叩き切ったのは東欧連邦。

溜まりに溜まった不満をぶつけるかのように、Ｕ．Ｓ．Ｏ．国内のマージ発電所を空爆したのだ。
同空爆により、北米西海岸の四割が更地と化したＵ．Ｓ．Ｏ．は即座に報復行動を開始。東欧連邦領遼東半島を占領し、旧モンゴル地方とシベリア地方に侵攻。
これが、地球全土を巻き込み、今現在まで続く泥沼化した《第五次世界大戦》と呼ばれる戦争の理由だと言われている……。

――ＡＣ．３０２０　Ｊｕｌｙ．７　東欧連邦領　旧エジプト近郊
『バルト隊、まもなく作戦エリアです』
『了解。戦闘体制に移行する。各員、システムスタンバイ』
東欧連邦領内を数台の大型トレーラーが疾走。
各トレーラーの荷台には、二機ずつ、角張った金属の巨人――多目的装甲と呼ばれる有人搭乗型軍用兵器が載せられている。
その多目的装甲の一つに、俺は乗っている。
正面モニターに表示される各種機体状況。
（ジェネレータ正常駆動。ブースタ、人工筋肉共に異常無し）
全システム、正常（オールグリーン）。

サブカメラに写るのは、無味乾燥した砂漠と――軍用兵器。
『バルド6、敵戦車部隊確認！距離、７０００』
『了解。トレーラーは停止。十分後、味方戦車部隊が交戦予定だ。ブリーフィングで説明した通り、俺達は横合いから崩す』
『『了解』』
味方機パイロット達の返答とほぼ同時に、トレーラーが停止。
搭載された多目的装甲が砂漠に降り立つ。
少し遅れて俺もトレーラーから降り、
『各機、ツーマンセルで散開』
部隊長の指示に従い、散らばる。
『……うわぁ、機外温度は７７．５℃だとよ、ヴェイ』
配置に着き、敵部隊の監視に移ろうとした直後に、後方支援のパイロットから無線。
機外温度？砂漠なら、そのぐらいは普通だろう。
「作戦行動中だぞ、バルド5。私語は帰ってからほざけ」
『へいへい……。真面目な奴だねヴェイは……って、戦車部隊が移動を始めやがったっ！』
……なんだと？

カメラの望遠倍率を上げ、確認――本当だ。
「……こちらバルド3、敵戦車部隊の移動を確認。奴等、味方戦車部隊に気付きやがったみたいだ」
『そのようだな。……今入った情報だと、味方戦車部隊が交戦開始したらしい。各機、全武装使用許可（ウェポン・オールフリー）。奴等を前線に合流させるな！』
『『『了解！』』』
伏せていた味方機が次々と立ち上がり、移動開始。
かくいう俺も、
「バルド5、援護は任せた」
『了解。思いっきり暴れようぜっ！』
後続機に援護を要請し、砂丘を飛び越える。
遠くに見える数多の主力戦車。距離は……７４８０。
歩行じゃ埒が開かない。
腰部後方に取り付けられたブースタを点火。
後方奔流が機体を前に押し、加速。
一気に距離を詰め、残り５０００ｍ。
再加速。

残り３２００ｍ。
そこで敵戦車部隊もこちらに気付いたらしい。
何両かが、こちらに砲塔を向ける。
だが、遅い。
『ヒャッハー!!』
『鉛のバーゲンセール、開催中だっ!!』
味方機が手にした３５㎜突撃砲を撃ち始め、
緩い放物線を描く砲弾に薄い上部装甲が撃ち抜かれ、乗員はミンチと血糊に変わる。
『二両撃破』
『俺は三両だ』
味方のキルスコアは聞き流し、俺も操縦棍のトリガーを引く。
レティクルの中心を基点に、３５㎜砲弾が飛び散る。
変わらず、緩い放物線を描いて、上部装甲をブチ抜き、鉄屑と不味いミンチが増えていく。
『おいおい、バルド3。俺の出る幕ねぇよ……』
「別に良いだろ。弾薬費が節約できる」
軽口を叩く余裕するある始末だ。……嫌な予感がする。　一応、警戒しておくか。

「バルド5、暇ならレーダーを起動してみてくれ」
『あん？レーダー？敵は戦車部隊（アイツら）だけだろう？必要ねぇよ』
「嫌な予感がするんだよ。……幾らなんでも、ザル過ぎる」
『ハァ……心配性だな、バルド3。了解だ。何もねぇ事を祈るぜ』
「恩に着る。通信終了（アウト）」
気が付けば、標的は全てが鉄屑に変わっている。
『バルド1から各機へ。撃ち方止め。目標は完遂した。帰投するぞ、トレーラーに戻れ』
『『『了解』』』
バルド隊の任務は終わった。これで帰れる。
各々、安堵しながらトレーラーに向かう中、脚を止める機体が二機。
俺とバルド5の機体だ。
「バルド5、結果は――」
『バルド5から各機へ！14時方向、距離7000。敵多目的装甲（MA）確認。数、5！』
嫌な予感が当たりやがったっ！
『クソッ！バルド隊各機、迎撃体制に移れっ！』
焦ったような部隊長の指示。

その指示を嘲笑うように、耳をつんざく飛翔音。
少し遅れて火柱が上がる。
『バルド７、大破！』
長距離砲撃……しかも、後方支援機を狙いやがった。
俺とバルド５は咄嗟に砂丘の影に隠れる。無駄と分かっていながら。
『敵に汎用砲持ちがいるな、バルド３』
「あぁ。……バルド１、砲撃許可を」
『……許可する』
『了解。野郎共、良い気になるなよ――』
暫し黙り――
『フォイア!!』
轟音を上げて、２８０㎜榴弾が空に放たれる。
数瞬遅れて、爆音。
着弾。成果は――
『一機破壊。だが、前衛機だ。クソッ！』
「距離は……４０００」
クソッ！有効打となるものがねぇ。

俺の多目的装甲の武装は３５㎜突撃砲と１５０㎜散弾砲。
どちらも近距離用。
味方で残っている汎用砲持ちはバルド５のみ。
彼は今も砲撃を行っているとはいえ、既に位置は割れており、見え透いた砲撃と言える。
よほど相手が阿呆でもない限り、当たるわけがないのだ。
（せめて、もう一門あれば……）
二門の汎用砲があれば、偏差砲撃で仕留められる可能性が上がるのに。
そう思いながら、大破炎上しているバルド７機を見る。
胴体――コクピットブロックに大穴が空いている。確実に搭乗者はミンチになっているだろう。
恐らく武装の方も……なんだと？
貫通した装弾筒付翼安定徹甲弾（APFSDS）に貫かれたであろう胴体後部に折り畳まれた汎用砲こそ大破しているものの、手持ちの５０㎜狙撃砲は無傷。
（……借りるぜ）
突撃砲と散弾砲を肩部ラックに懸架（マウント）。
バルド７から狙撃砲を拝借。砂丘に機体を投げ出し、構える。

機体システムが近接仕様である為、火器管制装置（FCS）の補助は無し。要するに、手動照準（マニュアル）。スコープを覗き、モニターに表示される十字線（クロスヘア）。

交差点と疾走する無骨な多目的装甲を合わせ――僅かにずらし、発砲。

一瞬だけ発砲炎（マズル・フラッシュ）がモニターを白く染め、超音速で撃ち出された徹甲弾は、砂漠用迷彩に彩られた無骨な多目的装甲後部――汎用砲――を破壊した。

（クソッ！大破ならずか。まぁ、長物（ロングアーム）を潰せただけ、御の字だ）

内心で毒づき、第二射。

今度は、同対象の右腕マニュピュレータが吹き飛ぶ。

またかっ！

やはり、手動照準は難しい。もっと練習すべきだったな。

――という、反省は後。比嘉の距離は２０００を切っている。突撃砲の射程内――

『野郎共ブッ殺してやらぁっ!!』

『蜂の巣になりやがれっ！』

突撃砲の射程内だと理解したのだろう。先程の戦闘でも初発を撃った二機が躍り出る。

無線から聴こえた言葉は完全にアドレナリンが回った、戦闘狂のそれだ。

（馬鹿野郎がっ！）

伏射（プローン）から立射（スタンディング）に移り、狙撃砲の残弾を撃ち切る。
咄嗟の射撃とはいえ、前衛機の左腕を破壊。
撃ち切った狙撃砲（デッドウェイト）はパージ。
代わりにマウントした突撃砲、散弾砲を再保持。
「友軍の援護を頼むぜ」
『分かってる。……任せな』
短い通信の後、俺も前線へと躍り出――ブースタを吹かす。
相手の４５㎜突撃砲の発砲炎が見えたからだ。
即座に３５㎜突撃砲を応射しつつ、距離を詰める。
ロックした敵機が識別され……データ表示。《ＤＩ　Ｔ０１Ｄ　バレット》。
武装は１８０㎜多連装ミサイルランチャー、４５㎜突撃砲、カーボンナイフ。
（ミサイルはいてえな）
誘導兵器は例え欺瞞が楽な赤外線誘導式とて、回避が面倒。
さっさとケリを着けよう。
ジェネレータ出力向上。
ブースタ再点火。
比嘉の距離は３００。

射程内（インレンジ）だな。
両マニュピュレータに握る砲――突撃砲と散弾砲の双方を斉射。
先に散弾砲の弾倉が空になるが、問題無い。
距離は１００以下。
格闘戦の距離。
それを悟ったであろう敵機がナイフを抜こうとするより早く、俺はブースタ起動。背後に回り込んだ後、双砲――正確には、砲身下部に取り付けられた大型カーボンブレード――を突き刺す。
コクピットが貫かれ、亀裂と刀身の隙間から赤黒い液体が溢れた。
排除完了だろう。
突き刺した砲を抜く。刀身は肉片に塗れ、紅く濡れていた。
『バルド1より各機へ。敵多目的装甲の殲滅を確認した。帰投するぞ』
同時に響く、部隊長の指示。
「バルド3、了解」
しかし、命令に従う部隊員は俺だけだった――

ReportI First Operating She's

西欧連合国軍第４機械化歩兵中隊――通称、バルド隊はあの作戦において、人員の九割を損失。
軍上層部は、当時のバルド隊隊長に全責任を押し付け、彼を不名誉除隊に追い込む。
結果しか見ないデスクワーク連中の常套手段。
権力など、悪い方向でしか使われないのだ。
とはいえ、残された唯一の生き残りたる俺が、再編された第４機械化歩兵中隊に残されたのは、一部の利口な高官の温情か。
ソイツには、感謝しないといけないな。
――ＡＣ．３０２１　Ｊｕｌｙ．７
あれから一年が過ぎた。
「……ったく、トレーニング中に呼び出しかよ」
俺は悪態を吐きながら、司令室に向かっている。

数分前、シュミレーション中に無線として指令が割り込んできたのだ。
砲声やギアの駆動音といった価値あるＢＧＭに溢れかえるのが戦場であり、情報量はかなり多い。
その中で戦場とは、或いは作戦とは全く無関係な音が流れ込むのは不快極まりなく、新兵の一部に毛細血管が破裂した奴がいた気がする。……ソイツはただ忍耐力と集中力が足りないだけだが。
などと考えるうちに司令室に着く。
「ヴェイ・フォールディ中尉だな。司令が御待ちだ、入れ」
「了解」
衛兵に促されて、入室。
執務机にふんぞり返る、中年太りの禿げた男の正面で敬礼。
「ヴェイ・フォールディ中尉、招集に応じて参りました」
「御苦労様。貴官も忙しいだろう。……要件を手短に伝える。貴官のパートナーが決定した。……入りたまえ」
男の言葉と共に、元気な少女の声。
ワンテンポ遅れて、背の低い黒髪の少女が入ってくる。
「彼女が貴官の新しいパートナーだ」

「天樹（アマギ） 楼（ロウ）一等兵です。よろしくお願いします」
少女――天樹の元気な自己紹介を聞いた俺は司令に向き直った。
「……司令。これは何かの冗談ですよね？」
「冗談ではない。彼女は今年度の新兵だ。第４機械化歩兵中隊には彼女の他、４名が配属される。……説明は以上だ。補充兵のリストは貴官の個人端末に転送してある。後は各自やっておくように」
「……了解」
敬礼。
退室。
（納得がいかねぇ……）
エリックの後任が新兵の少女だと？
ふざけやがって！
徴兵対象に女児まで追加したのか、上の野郎共？
だが、思いとは裏腹に脚は動くものらしい。
いつの間にか管理棟を出ており、第４機械化歩兵中隊の格納庫を目指して歩いていた。
「中尉、どうしたんですか？」

「……平時は階級で呼ばなくていい」
背中がむず痒くなる。
「分かりました。では、フォルさんと呼びますね」
「……フォル？……あぁ、フォールディの略か」
初めて呼ばれたぜ、そんなあだ名。
まぁ、なんだっていい。問題は戦場で使えるか、使えないかという基準だけ。
平時は治安を乱しでもしなければりゃ、問題無い。
「……天樹一等兵、ＭＡの操縦時間はどの程度だ？」
「う～ん……大体７２時間だったと思います。後、別に名字か名前の呼び捨てで構いませんよ？」
と、天樹は答えたが、後半部分は半ば聞き流していた。
（７２時間？……運が悪かったのか）
Ｍａｔｃｈ　Ａｒｍｏｒ――多目的装甲は操縦が比較的容易であり、実技訓練時間は１８時間だったはずだ。
それを除外しても、かなりの時間がある。それなりに実戦を積んじまったらしいな。
「そういうフォルさんはどのくらいなんですか？」
「覚えていない」

操縦時間なんてもんは中堅以降はどうでもよくなってくる。そんな簡単な指標のみで、熟練者だと決めつけられて殉職する臆病者が増えるだけだ。

……とはいえ、正確な操縦時間は機体管制システムや中央の情報管理部に記録されてるだろうが。

「そういう話はまた今度だな。……着いたぜ」

俺はそう言って、格納庫前で整列していた四人の男女の元に向かう。

「お前ら、第４機械化歩兵中隊の新兵だな？」

「「「Ｊａ」」」

綺麗に揃った挨拶だな。

「俺は第４機械化歩兵中隊、第２小隊隊長のヴェイ・フォールディ中尉だ。では、右端の奴から姓名と得意とするポジションを言ってくれ」

そう言うと、右端、金髪クルーカットの無個性な少年が口を開く。

「Ｊａ、コニー・ノリンコ一等兵です。得意ポジションは……索敵です」

索敵か。……悪くない。

「アリサ・ケルテック一等兵だ。強襲と奇襲が得意」

続くのは、茶髪を乱雑に纏めた、男勝りの勝ち気そうな少女。コイツは強襲か。すぐにくたばりそうだな。

「リタ・トーラス。階級……一等兵。狙撃は……得意」
次いで、無表情な銀髪の少女。傍目には精巧なビスクドールにしか見えない。……が、狙撃が得意か。納得だ。
「エーデル・マウザー、二等兵。得意なのは強襲！」
最後は、これまた手入れのなってねぇ金髪の少年。よく選別されなかったものだ。早々にくたばらねぇといいが。
「後、俺の横にいるのが、天樹　楼一等兵。以上が第４機械化歩兵中隊、第２小隊の面子だ。ウチの隊長は基本的に信頼の置けない奴とは組まん主義らしく、暫くは俺がお前らの直属の上官になる。質問はあるか？」
暫く待つが、件の４名は直立不動のまま。
「……質問無しか。よし、早速だがトレーニングだ。格納庫内のＭＡに搭乗後、シュミレータを起動しろ」
「「了解」」
「了解です」
「……Ｊａ」
格納庫に入っていく新兵達を見送り、俺も後を追う。
整然と並ぶウッドランドの無骨な多目的装甲。

西欧連合国制式採用のＳＥＩ　ＭＴ１０Ａ３《ノート》。
一番奥に鎮座する機体に乗り込み、ハッチ閉鎖。
首に提げていたゴーグル状のＨＭＤを懸け、システム起動。
続けてシュミレーターを起動しようし――喧しく鳴り響くサイレン。
「チッ……」
舌打ち。
お呼びがかかりやがった。
『……バルド２、出撃だ。……準備を進めろ』
同時に聴こえる、バルド１――中隊長――からの命令。
「了解。……バルド２より第２小隊各機へ。武装した上で、表に出ろ！出撃だっ!!」
『『『了解』』』
『Ｊａ』
指示が通った事を確認し、３５㎜突撃砲と１５０㎜散弾砲を保持。格納庫から出る。
『遅いぞ、バルド２』
既に待機する大型輸送機。
当然、腹への入り口は開いている。
「悪いな。新兵達がモタついている」

『……お守りは大変だな』
「同情するなら、私語を捨てろ。……まぁ、真面目にやってる奴なんざ、ほぼいねぇのは分かってるがな」
『お前もな』
そこで、輸送機パイロットと俺は話を止める。重々しい振動と駆動音が聴こえたからだ。
格納庫入り口をサブカメラで確認。仕様の異なる、数種の《ノート》。……準備が終わったか。
「総員、輸送機に乗り込め」
新兵達を輸送機の腹へ押し込む。
全員が搭乗したところで、俺も乗り込み、ハッチ閉鎖。
『時間がねぇ。……飛ばすぜ？』
が、確認と離陸は同時。……余程切羽詰まってやがる。
強烈なGが俺達を襲い、シートに叩き付けられる身体。
新兵達の呻きが聴こえる。……早く慣れてもらわんとな。
（……で、戦況は……）
作戦区域、グレートブリテン島南部。

現在確認された敵は主力戦車一個小隊に、《アサルト・フィッシュ》一個小隊か。ソイツらに対して、主力戦車二個小隊が応戦中。俺達と第５機械化歩兵中隊は増援ってとこだな。

（……まぁ、新兵達のトレーニングには丁度良いな）

これで死ぬようなら、訓練監督をブン殴らなければならないが、おそらくは大丈夫だろう。

「さて。コールサインは覚えているな？」

『『『『Ｊａ』』』』

「いい返事だ。……では、作戦を説明する」

一旦、言葉を句切る。

「既に確認したかも知れないが、戦場はグレートブリテン島南部。敵勢力が主力戦車一個小隊と多目的装甲一個小隊。何れもが、Ｕ．Ｓ．Ｏ．勢力だな。……先行している友軍の戦車部隊前方、敵勢力後方に俺達は降下。挟撃の形を取る。各自、多目的装甲を優先的に狙え。それ以外は誤射しなければ、文句は言わん」

『大雑把過ぎねぇか、隊長さん？』

この声……ケルテック一等兵――バルド１０か。

彼女の疑問は正当なもの。……だが、重要な事を忘れている。

「お前らがどの程度使えるか分からん以上、下手に作戦も組めねぇんだ」
『了解だ。取り敢えず、色と形に見覚えのねぇ奴を吹っ飛ばせばいいんだろ？』
今度はマウザー二等兵――バルド12だな。口の悪い奴め。
「そうだ。U．S．O．の多目的装甲は曲線的だから間違えんだろう。バルド8、9、11は何かあるか？」
『『特には』』
『私は、隊長の援護でいいでしょうか？』
「あぁ。誤射はしないでくれよ、バルド8」
と、天樹一等兵――バルド8に答えた所で、作戦領域上空に到達。
『こちら、ライヒ中隊。機甲部隊の援護を開始する。バルド隊は早く降下してくれ』
「こちらバルド2。少し待ってくれ」
『急いでくれよ』
交信断絶。戦闘に入ったらしい。
「もうすぐ降下だ。準備しろ」
『『『『Ｊａ』』』』
全員が降下準備を始める中、輸送機はハッチ開放。
ランプ――グリーン。

「準備が出来た奴から降下。……作戦開始っ！」
言いながらも、俺は降下する。
視界は蒼――ではなく、灰色。
この辺りは天気が優れないのか。……視界不良には注意が必要だな。
レーダーに目を移す。
やや前方に赤い点が散乱。
作戦通り。
高度は――――６００ｍ。
ブースタを下に向け、点火。
落下速度が徐々に低下する。
着地。
ブースタ角度修正。後方へ。
再点火（リブースト）。
両腕武装の安全装置を解除。
直後、
『バルド１０、交戦っ！』
『バルド１１、攻撃開始』

味方が攻撃開始。
……こっちも始めようか。
１２時方向、距離７００。敵機識別――《Ｎ―Ｄａｔ０５　アサルト・フィッシュ》
流線型の外観、腕部一体型銃剣付３０㎜機関砲が特徴。
外見通り装甲は薄いが、機動性は舐めていいものではない。
が、俺に背を向ける同機体は標準装備らしいミサイルランチャーを装備していない。
機動性重視の方針をとったか？
まぁ、火力が落ちているのだから、多少は楽になるだろう。
ブースタ出力向上。
突貫する。
トリガーに指を懸け、ＨＤＭ上に表示される青い照準（レティクル）。
敵機に重ね――ロック。
フォイアッ！
数多の３５㎜徹甲弾（ＡＰ）と２０㎜球形弾（ラウンド・ボール）が撒き散らされ、前方にいるであろう、友軍に砲火を加える敵機へと迫り――
数秒後に胴体中央を抉り取られた敵機が転倒。
中身は鉄（パイロット）と肉のハンバーグ種に変わっただろう。

（ざまぁねぇな。……次だ）
一個小隊の多目的装甲は六機。他の機体は――１４時方向、１２００ｍ先か。
方向転換。
移動開始。
同時に無線起動。
「バルド２からバルド８へ。ポイントＳ―１９１４にジャガイモ畑を作れ」
副官へ砲撃指示。
『バルド８、了解。耕作作業、始めますよ～』
という返答ともに無線断絶。
「バルド２から各機へ。ポイントＳ―１９１４から退避。霧に飲まれるなよ？」
砲撃注意の数秒後、一定のリズムで爆音が複数回響き、
立ち上る三つの火柱。
後は二機……いや、一機か。
レーダー上の赤点は一つだけだ。
ブースタ出力を上げつつ、
「バルド８、三機の破壊を確認。周辺警戒に移れ。他は周辺警戒と残党狩りだ」
新たな指示を飛ばす。

『『『『Ｊａ』』』』
了解の言葉を確認。
無線断絶。
――１１時方向、距離８００に敵機。……捕捉（ロック）されています。
上等だ。
操縦棍を倒し、ペダルを踏み直す。
機動変更。
突貫からジグザグ機動へ。
過去位置を過ぎていく３０㎜砲弾。
（素人が……）
動く敵には未来位置を狙えよ。
突撃砲を応射しつつ、近付く。
が、残り３００程度になったところで、敵機は鉄屑と化した。
……これで終わりか。
「バルド２より各機へ。損害（ダメージ）は？」
『『ありません』』
『ねぇぜ』

『損害無し』
『あるわけねぇだろ』
……全員、無傷か。
後は戦車だが、レーダーを見るより先に届く無線。
『ライヒリーダーからバルド２へ。敵戦車小隊の撃破が完了した。そっちはどうだ？』
「こちらも今、終了したところだ」
『そうかい。……じゃ、こっちは先に帰投するぜ。チンタラしてると飯が冷めちまうからな』
「了解した。俺達もする」
と、無線を切った俺達は帰投準備に入る中、立ち昇る火柱を目にした――

ReportⅡ The Innocent Girl?—前編—

第5機械化歩兵中隊は全滅した。
あの無線の後に立ち昇った火柱は、アイツらだったらしい。
どんな熟練者だろうと運が悪ければ死ぬし、運が悪くなくとも、いずれは死ぬ。
それが戦場の摂理であり、世界の本質でもある。
よって、今現在必要なのは、彼らの死因であり、死を悲しむ事ではない。
回収された機体はコクピットを正確に寸断されていたらしく、パイロットは皆、ミンチと化していたらしい。
が、死体の状況は多目的装甲パイロットの死体としては、ごく普通だ。
普通では無かったのは、奇跡的に回収できたという、戦闘記録機——ミッションレコーダー——の内容だった。
『クソッ！ロックできねぇ！』
『手動照準で対応し——ぐあぁっ！』
『ライヒ8、大破』

『この野郎ッ！』

『突出するな、ライヒ3！各員、包囲射撃を展開。所詮は紙装甲だ、当たれば殺れる！』

――レーダーに映らず、火器管制装置（FCS）のロックオンも不可能な、映像記録に映る、深い蒼に染め上げられた多目的装甲。

その両腕には、展開式の大型実体剣（カーボンブレイド）、短機関砲が握られている。

他に武装が見受けられない以上、ライヒ中隊はカーボンブレイドで葬られたと見て間違いない。

近接戦闘は嫌というほどやって来たが、カーボンブレイドは使う気が起きない。……デッドウェイトだからだ。

絶大な威力を持とうとも、それが取り回しの悪い近接武器ならば、不要である。

……ま、何にしてもマニュアル照準の精度が重要になる相手か。

前衛機が搭載するＦＣＳは敵機をロックオンし、銃口を追従させる機能がある。

ただ砲弾を叩き込むだけならば、有効な機能であるが、パイロット自身の射撃精度を向上させる物ではない為、今回のような機体相手には非常に分が悪くなる。

一方で後衛機のＦＣＳでは、ミサイル使用時以外はマニュアル照準固定であり、サポートされるのは風向、風速、外気温、湿度等といった射撃精度に関わるデータの提示のみであり、単純に考えれば、ステルス機にも対応できる。

が、高機動機が主体のＵ．Ｓ．Ｏ．軍相手には、キツいものがあるのだろう――

（……今、何時だ？）

端末の画面から視線を外し、時間を確認。

――Ａ．Ｍ．８：２１

夜通しで考え事かよ……。

俺らしくねぇ。

重い頭を引き摺りながらベットに横になる。

作戦があったのは１２時間前。

それから、食事やら何やら済まして宿舎の自室に戻り、ポルノ雑誌を読み漁る気にもなれずに、小隊メンバーの訓練メニューデータ作成、ライヒ中隊壊滅の考察に耽った結果、今に至る。

（眠れねぇ……）

目が完全に冴えてやがる。

……当然だ。

俺は考え事の時はブラックコーヒーを飲む。

カフェインを摂り過ぎて眠れなくなるというのは、迷信だという話を聞いた事があるが、真偽のほどは定かではない。……第一、カフェイン量はコーヒーより紅茶その他の

方が多い。

（まぁ、いいか……一日は始まってんだ……）

立ち上がり、ベッド下から細長いプラスチックケースを取り出す。

中身は特製の滋養強壮剤が詰まった小瓶――早い話、栄養ドリンクだ。

一本取り出し、封を切って一息で飲み干す。

喉を通過する激痛、味覚を狂わす苦味と酸味が意識を鮮明化させ、頭痛、疲労が消し飛ぶ。

「ハァ……ハァ……」

口腔内が気持ち悪いが、怠さが吹き飛んだだけ良しとする。

部屋着を脱いで軍支給の耐火カーゴ、ジャケットに着替え、兵舎を出ると――

「「「１４５！１４６！１４７！１４８！１４９！１５０!!」」」

「１４……２、１……４３、１……４……４……１……４……５……ハァ……ハァ……」

「誰が休んでいいと言ったっ!?寝るな、蛆虫がっ！」

「でも……腕に力が……がふっ!?」

「減らず口をほざくな、蛆虫野郎っ！甘ったれた言葉は母親の腹ん中だけでほざきやがれ!!全員、１５０回追加だっ!!」

「「「「Ｊａ!!」」」」

腕立て伏せを行う集団の声。……おそらく、第７機械化歩兵中隊の奴らか。

暑苦しい事この上無い。

無視して通り過ぎるが、

「東の馬鹿共、蹴り飛ばしー」

「「「「東の馬鹿共、蹴り飛ばしー」」」」

「素敵なご褒美叩き込めっ！」

「「「「素敵なご褒美叩き込めっ！」」」」

「Ｕ・Ｓ・Ｏ（オーシャン）・はろくでなしー」

「「「「Ｕ・Ｓ・Ｏ（オーシャン）・はろくでなしー!!」」」」

「女を見かけりゃ喰らうだけー」

「「「「女を見かけりゃ喰らうだけー!!」」」」

今度は、ケイデンスを歌いながらランニングする集団が目の前を横切っていく。

（第１３歩兵大隊か……）

アイツらは新兵か。

あの歌は新兵を軍隊式に矯正する為のもので、主目的としては士気高揚、連帯感の強化。……まぁ、ガス抜きも含まれているが、それはどうでもいい。

俺としてはあの新兵共の染みったれた精神がどこまで保つのか、が見物だな。
（……我ながら、腐った事考えてるな）
やっぱり疲れが取れてないな。
……いや、エネルギーが足りてねぇからか？なら、早く飯を食わねぇとな……。
かなり距離が空いたとはいえ、聴こえるケイデンスを聞き流し、歩みを進める。
……行き先は第４機械歩兵中隊の多目的装甲格納庫。
ウチの新入りに今日の訓練課題メニューを伝えねぇと……。
飯はそれからである。
（だが……食堂は閉まってるだろうし……外食しかねぇか）
出る時間が遅過ぎたのは、失態か。
などと思ううちに、格納庫に着き、集合している５人の新兵を発見。
確認するまでもなく、俺の小隊メンバー。
「わりぃ、遅くなった」
軽い調子で近付いていく。
「おはようございます、隊長」
「フォルさん、遅いですよー」
「私達から見れば、上司なのは分かるが……重役出勤は止めてほしいぜ、隊長」

「……Guten Morgen」
「へっ、緩い隊長だな！」
返答は個人差がある。当然だが。
（……取り敢えず、エーデルにはキツめのメニューを課せるか）
ケルテック一等兵の返答はまだ許せるが、流石にアレは許せない。
自身の携帯端末を操作し、小隊メンバーへと訓練メニューを送信し、彼らに向き直る。
「早速だが今回の訓練もシュミレータ使用だ。各自、携帯端末で確認しろ。……以上、訓練開始！」
「「「「Ｊａ」」」」
敬礼を返したメンバー達が格納庫へと入っていく。
その様子を眺めた後、俺は格納庫から離れる。
いつまでも空きっ腹というわけにもいかない。

数十分後、俺は軍基地近くの繁華街を歩いている。
この辺りの飲食店は値段のわりに味が良い。……どんなに酷くとも、軍の味気ねぇ携帯食料よりは。
その中でも、俺が気に入っているのは《青錆》という名の飲食店。

名前こそアレだが、美味いし、比較的安い。
（さて、飯……）
《青錆》に入ろうとして、
「君、一人かい？」
男の声が耳に入る。それも、明らかに下心の垣間見える類いの。
（……なんだよ、ナンパか？）
ならば後に続くのは、健全な青少年がゲロを吐くような、醜い乱交パーティーだろう。
（せめて夜にやれよ……）
昼じゃ目立つんだよ。
苛立ちながら、声の元に向かう。
取り敢えず、ナンパ師を一発殴ってから飯だ。
……で、行き着いたのは、路地裏。
「俺達とお茶でもどうだい？」
「大丈夫、お茶するだけだ」
俺と同じ耐火軍装姿の男達が、何者かに話しかけている。……肝心の何者かは、見えないが。
（あの顔ぶれ……第１１機械化歩兵中隊かよ）

馬鹿共が。

――第１１機械化歩兵中隊。規律をゴミ箱に投げ捨てたとしか思えない、不良共。おまけに実力は新兵に毛が生えた程度である為、はっきり言って軍の汚点である。

今度は誰に声を掛けているのか……。

と、思った矢先に聴こえた声は、

「う～ん……何処でお茶するの？」

やたらと高い、可愛らしい少女の声だった。

おいおい……馬鹿共、ついに幼女漁りかよ。女に餓えすぎだぞ。

「お、行く気になったのかい？」

「場所によるよー」

「そうだな……お嬢ちゃんの好きな店に行こうか」

「そうと決まれば、早く行こうか」

男の一人がそう言った直後、何かが折れる音が聞こえた。

「ぐあぁぁっ!?腕があぁっ!!」

絶叫する男の腕は醜く腫れている。骨を折られたらしい。

「このガキッ……人が下手に出てるから――っ!?」

怒りを滲み出した別の男の首に絡む、白く細い人間の脚。

遅れて、白と金の塊が動き――
「ごふっ!?」
アスファルトに打ち付けられる生ゴミ。見事なフランケンシュタイナー。
「ワンダウンー♪」
白と金の塊は可愛らしい声で言い、立ち上がる。
どうやら、馬鹿共のナンパ相手は、この白と金の塊――もとい、金髪の少女だったようだ。
「次、いっくよー☆」
残りの馬鹿共が動くより早く、少女が動く。
「うおっ!?」
手近な相手に対して、ダッシュの勢いを利用した、スライディング気味の足払い。
「がっ!?」
浮き上がった身体目掛け、遠心力を乗せた、回し蹴りが食い込み、アスファルトと蹴りのドリブルの後、ダウン。
「トゥーダウンー♪」
言いつつも、蹴りの遠心力で飛び上がった少女は空中で身体を捻り、
「ぐはっ!?」

別の男の脳天に踵落とし。
「このア――ぐふっ!?」
「スリーダウンー☆」
続けて、ショートダッシュからの鳩尾を狙った掌底。
怯む男。
「フォーダウンー☆」
「っ!?」
そして、無慈悲に繰り出された、金的。
見てるこっちの背筋が寒くなる……が、これで少女をナンパしていた馬鹿共全員がダウン。
傍観する価値も無かった、ストリートファイトは呆気無く終了したのだ。
「ふぅ……。さて、戻ろ――ん?」
振り返った少女と視線が交錯。
長い金髪に、整った端正な顔。色白かつ華奢な身体を包む白いロングのワンピース。
ビスクドールじみた少女だ。
「おじさん、いつからそこにいたの?」
屈託の無い声で問われ、

「ついさっきだ」
と、答える。間違ってはいないはずだ。
だが、少女は納得していないのか、暫し俺の顔を眺め――
「……この人達の知り合い？」
倒れ伏す男を指差し、問う。
知り合いというか、同業者だが……正直言うと、俺も蹴られそうだ。
「……いや、違う。ともかく、あぁいうゴミ野郎には気を付けろよ」
俺はシラを切り、裏路地を後にした――

ReportⅢ Hunting Lucifer

AC．3021 July．8 A．M．9：25 旧オーストラリア北部上空

『作戦領域上空に到達。各機、降下準備』

「了解」

俺は閉じていた瞳を開く。

――MainSystem Activation Combat Mode

……OK．

灯る計器類のランプ。

メインモニターに映るは、無骨な鉄色と……シティデジタルカモフラージュカラーに染め上げられた流線形の多目的装甲達。

計器類の異常は無し、武装各種も同じく。

……俺は大丈夫か。

「……ルシファー・リーダーより各機へ。準備は出来たか？」

『ルシファー2、問題ありません』

『ルシファー3、同じく問題ねぇ。早く撃たせてくれよ、隊長』

『ルシファー4、システムオールグリーン。ＯＫです』
『ルシファー5、いつでも行けますぜ、隊長』
『ルシファー6、暖気運転も終了。行けるぜ』
全員、準備万端。やる気も充分。
頼りになる奴らだよ。
「了解だ。降下地点までは後どのくらいだ、オペレーター？」
『降下地点上空に到達。降下開始してください』
質問と共に、流れ込む光と風。
そして――――蒼と白。
「各機、降下開始！」
『『『『了解』』』』
反響する掛け声。
降下する多目的装甲。
迎えるは蒼と――――砲火。
『クソッ！嗅ぎ付けてやがったな！』
『私語は厳禁。作戦に集中して、ルシファー6』
『分かってるよ、ルシファー2。……だが、愚痴ぐらい吐きたくなるなるだろ、隊長？』

俺に振るなよ。
「こういう時は運任せだ。減らず口は死期を早めるぞ」
どうとでも取れる返答を返し、ブースタを小刻みに吹かしては、軌道修正。
対空砲火を潜り抜けていく。
それは愚痴を洩らす味方も同じであり、器用に避けていき、
全機が損害無く、着地する。
「各機、兵装使用自由（ウェポンオールフリー）。やるぞ」
言いつつ、ブースタ起動。
敵陣へと突貫する。
――Ｃａｕｔｉｏｎ
人工音声が告げる。ロックされている。
だが、それがどうしたのか。
いつもの事だ。
小刻みにブースタの方向を調整し、過去位置を砲弾が抉っていく。
本来ならば砲弾を目視で避ける事は不可能に近い。
が、多目的装甲は補助機能として持つ自動照準（ロックオン）があり、手動照準を行うパイロットは
後方支援機の奴だけ。

機体操作の簡略化に貢献した同機能は、同時にパイロットの射撃精度を低下させてしまう。

故に、たとえ旧型レシプロ機程度の速度しか出ない、この機体でも被弾するとは思っていない。

――Ｉｎ　Ｒａｎｇｅ

再び告げられる、メッセージは、武装の射程内に敵を収めたというもの。

右腕保持の４０㎜突撃砲を構え、表示される青いレティクル。

照準調整。

射撃開始。

口径のわりに軽い反動と、対照的に激しい発砲炎（マズルフラッシュ）を発しながら、数多の４０㎜徹甲弾が吐き出される。

しかし、元々反動制御に難がある、この突撃砲では一機の頭部と両腕部を破壊するだけに留まり、

ＨＤＭ右隅に表示された４０㎜突撃砲のマガジン内残弾情報が数瞬でゼロになり、機体システムから告げられるリロードの催促。

（クソッ！）

無視して、武装切り替え。背部外装の多連装ミサイルランチャーへ。

表示されていたレティクルが消失。
代わりに、赤い正方形状のレティクルが複数表示される。
その数、１４。
ミサイルランチャーの装弾数と同じだ。
既にロックは完了。
「悪いが……眠ってくれっ！」
全弾一斉射。
１４発の１８０㎜ミサイルは白煙と共に射出され、上空へと角度を修正。
ミサイルの誘導パターンが、敵機上部を狙う、トップアタック式の為だ。
確認した後、
――Ｐｕｒｇｉｎｇ
空のランチャーをパージし、４０㎜突撃砲の空マガジンもエジェクト。
スペアマガジンに付け替えるようとし――
「っ!?」
前方に一機の多目的装甲が見えた。
咄嗟に左腕部に握る２４０㎜ロケットランチャーのトリガーを引く。
高い飛翔音と白煙を引いたロケットが敵機の胸部を直撃。

高速のメタルジェットが装甲を貫徹。パイロットも死傷しただろう。
「クソッ！また、殺っちまった」
一人、殺した。
俺の中に人殺しの罪悪感が生まれる。
そして、追い討ちをかけるように、ミサイルが着弾。
装甲兵器に共通する上部装甲の脆さ故に、簡単にコクピットブロックへとメタルジェットが到達。
パイロットは全員死亡。
これで、１５人殺した。
『隊長、うるせぇよ。人殺しぐらい慣れろよ』
『全くだ。隊長自体は嫌いじゃねぇが、人殺しに慣れてねぇ甘ちゃんな所だけは気に入らねぇ』
トドメと言わんばかりに、ルシファー３、６が怒りを露にした。
『罪悪感に打ち拉がれるのは勝手ですが、せめて心の内でしてください、隊長』
「……あぁ。忠告ありがとう、ルシファー４」
……そうだ。
悔やむのは後にしなければ。

マガジン交換を終えた４０㎜突撃砲を構え直し、加速する。
「ルシファー各機、状況を伝えろ」
同時に、味方の状態確認。
『ルシファー2、異常無し。支援を続行する』
『ルシファー3、左腕に流れ弾を食らった。左腕３５㎜突撃砲が使えねぇ』
『ルシファー4、右腕破損。戦闘自体は可能です』
『ルシファー5、異常無し。骨がねぇ奴等ばっかりだ』
『ルシファー6、異常無し……クソッ！被弾した！右腕３５㎜突撃砲破損。支援は続けられるっ！』
半分以上が損害有りか……。
今回は手強い奴等だからな……。
「了解した。……損害の出た者は無理をせず、撤退も考慮にいれて行動しろ」
『『『『了解』』』』
味方の返答。
突撃砲を速射。
一機の両腕を破壊。
――Missile Alert

ミサイルロック警告。
すぐに、赤外線照射元に向け、左腕ロケットランチャーを向け、発射。
一機破壊。
16人目。
更に、近くの数機が同時に破壊される。
ルシファー2、6の援護だな。
良いタイミングだ。
と、思ったところで、飛来音。
ブースタを吹かし、サイドダッシュ。
数瞬後、元いた位置で爆発。
多目的砲か？
武装分析、対抗策として、掩体に隠れようとするも、継続的に響く飛来音。
数瞬遅れて着弾する多目的榴弾（HEAT-MP）に追い立てられ、ままならない。
嵌められた。
そう、直感する。
相手側は俺達の戦術を読んでいた。
前衛機は囮だったのだろう。

追い立てられた先に待っていたのは、２０機もの多目的装甲。
集団の中心に立つ、背部に連装式の多目的砲を備えた、見るからに重装甲型と思われる機体。
他の機体は極一般的な東欧連邦の量産型多目的装甲である以上、コイツが先程の砲撃を行ったのは自明の理。
（……やるしかないな）
腕の一本、脚の一本は覚悟しないといけないな。
腹を括り、操縦棍を握り直し、味方に告げる。
「ルシファー2、6。俺の前方に降らせろ」
『ルシファー2、了解』
『ルシファー6、了解だ』
仕込み砲撃。
さて、始めるか。
――Ｃａｕｔｉｏｎ　Ｃａｕｔｉｏｎ　Ｃａｕｔｉｏｎ
幾重にも重なるロック警告。
ブースタを吹かし、変則機動で対応。
外装ギリギリの位置を砲弾が通過していく、冷や汗物の状態。

しかし、痺れを切らした数機が俺に向かって突貫。
直後、飛来した砲弾により、破壊。
残りは１６、７機か？
あまりやれていない。
もう、炙り出しは通用しないだろう。
「ルシファー２、６もっと前に降らせろ」
『了解』
ならば直接、上に降らせるまで。
我ながら、浅はかな考えだな。
自嘲しながら、４０㎜突撃砲で二機破壊。
残り１４機。
――ブースタ燃料　残り６０％
（……ヤバイ）
燃料面の心配も出てきたか。
全力に近い機動をしているからな。……燃料を食うのは当然だ。
っと、支援砲撃命中。五機破壊。
残り９機。

マガジンエジェクト。リロード。
――右腕武装　スペアマガジン　残り４本
突撃砲の残弾も少ないな。左腕のランチャーも残り一発。
それ以外は、カーボンナイフだけか。
（この機体で格闘戦は……自殺行為だ）
何としても、残弾尽きる前にカタを着けないとな。
『こちらルシファー３。辛そうだな、隊長。援護に向かうぜ』
『ルシファー４、同じく援護に向かいます』
『ルシファー５、隊長に死なれちゃ、目覚めが悪いからな。俺も援護に向かう』
「そっちの分担は片付いたのか？」
味方の援護発言に、そう返す。
俺が生き残ろうが、敵が残っているのでは意味が無い。
『『片付いているぜ』』
『問題無いです』
「ならば、良い。……流石に１対２０はキツい」
言いつつ、一機破壊。
『すぐに向かうぜ』

『何とか持ち堪えてください』
『死ぬなよ、隊長』
味方の声を聴きつつ、更にもう一機。
リロード。
残り３本。
支援砲撃。
二機破壊。
『ルシファー2、９０㎜狙撃砲、残弾零。直射支援の為、ポイントを変更する』
『ルシファー6、同じく６５㎜速射砲の弾が切れた。……前線に合流する』
頼みの綱である、長距離支援も打ち止め。
後は、時間との勝負。
突撃砲を斉射し、一機破壊。
後、３機。
リロード。
残り2本。
――ブースタ燃料　残り３０％
ブースタ燃料は僅か。

余裕が無い。
突撃砲の射撃モードを全自動（フルオート）から半自動（セミオート）へ。
照準補正。
発射。
的確に撃ち込み、半マグで二機破壊に成功。
直後、衝撃。
――左肩部サブブースタ被弾。サブブースタ出力３０％低下。
衝撃で動きが止まる。
二度目の衝撃。
――右肩部サブブースタ被弾。サブブースタ出力、０％。
向こうは両腕の突撃砲を全自動でブチ撒けている。
所謂、牽制射撃。
運悪く被弾したに過ぎない。
メインブースタ、出力向上。
ジェネレータ出力向上。
被弾硬直をメインブースタ出力の向上で無理矢理掻き消し、残る重多目的装甲に対峙する。

向こうは、撃ち切った二挺の突撃砲をリロードし終えていた。
リスタート。
メインカメラに捉えた敵機の砲口から射線を予測。
変則機動で距離を詰め、比嘉の距離は８００ｍを切る。
左腕ロケットランチャーを構え、メインブースタ最大出力。
同時に、発砲。
撃ち出されたロケットが敵機に損害を与える――と、思いきや、突撃砲の斉射によって、迎撃される。
更には――
――左腕部被弾。左腕損壊率５０％。肘部以下喪失。
流れ弾に巻き込まれ、左腕部が肘から下を失う。
残る武装は４０㎜突撃砲とカーボンナイフのみ。
敵機が重装甲である以上、近距離から撃ち込まなければ、効果は薄い。
対する敵機の武装は……二挺の突撃砲と……肩部に多連装ロケットポッド。それに、背部の連装多目的砲。
既に、比嘉の距離は５００ｍを切った。
格闘射撃戦で挑むしかないか？

そう思いつつ、突撃砲による射撃。
無論、撃破できるとは思っていない。牽制だ。
撃ち出された４０㎜弾が敵機の装甲に弾かれ、或いは浅く抉り、大したダメージを与えない。
残り２００ｍ。
この距離ならばっ！
射撃モードを全自動へ。
残弾全てをバラ撒く。
目に見えて、装甲が抉れる。
リロード。
残り１００ｍ。
照準を補正し、トリガーを引こうとしたが、
「がはっ!?」
衝撃が俺を襲う。
――胴部被弾。損壊率３０％。
メインカメラはまだ生きている。
胴部被弾の時点で、普通は死んでいる。

今回は神に救われたようなものか。
ならば、それを無駄にしないようにしなければ――
照準補正。
前方にブースタを吹かせ、後退しつつ、突撃砲をバースト射撃。
着弾したのは――肩部ロケットポッド。
おそらく、他より脆いだろうと思い、撃ち込んだが――結果は、
内部弾薬に誘爆し、肩部が吹き飛ぶ。
同時に敵機は後退し始め、突撃砲の残弾も尽きる。
――ブースタ燃料　残り１９％
機体からの警告。
戦闘機動では、帰投前に燃料切れになる。
（……目の前にいるのに……迎撃できねぇのかよ……）
俺は悔しさに拳を握り込む。
既に敵機の姿は見えなくなっていた――

Report Ⅳ The Innocent Girl? ―後編―

数分後、俺は《青錆》に入る。
「うわぁ……趣味の良いお店だね～」
先程出会った、白と金の少女と共に。
本当は、この女と一緒になど来たくはなかったが、付いてきたのだ。
エネルギー不足の身体を栄養剤で無理矢理動かしている俺にとって、少女を追い払うのは無駄な労力だと判断した為、とも言えるがな。
物珍しそうに店内を見回す少女は無視。カウンター席に着く。
同時に声をかけられる痩身の男性の発言は、
「子連れとは珍しいな、ヴェイ。……どこで攫ってきた？」
酷いものだ。
「攫ってねぇよ、マスター。……腹に溜まる物をくれ」
不機嫌を隠す事無く、目の前に立つ、痩身の男性――マスターに雑なオーダー。

「腹に溜まる物、か。……さては朝飯を抜いたな?-まぁ、良いけどさ。少し待ってろ」
それきり、マスターは調理を始める。
後は待つしかないか……。
ならば、出来る限りエネルギーを節約しなければ……。
空きっ腹に水を流し込み、店内ＢＧＭに耳を傾ける事十数分。
「こんなモンかな」
出された料理は、アイスバイン、ライ麦パン、アイントプフ、ヴルスト。……量はあるみたいだな。
余談だが、ドイツ連邦は朝食をしっかり摂り、昼と夜はそこそこか少なめという三食の形態を取っているらしい。
かくいう俺もそういうクチだが、今は腹に食料（モノ）を詰める方が先決。
身体中が栄養分を求めている。
パンは食い千切り、アイスバインとアイントプフは掻き込むように、胃に流し込む。
双方完食した後、ヴルストも腹に収める。
計１０分も掛からなかった。
「……余程空腹だったんだな」
「……あぁ。昨日、色々とあってな」

夜中は人間本来の活動時間ではない為か、エネルギー効率が悪い。……どうでもいいか。

「で、そっちの嬢ちゃんは何か注文するかい？」

そっちの？

俺は真横を見る。

例の少女がいた。

「うーん……。シュトーレン、かな？」

「シュトーレンか。……少し待ってな」

オーダーを受けたマスターは奥へ。

同時に、少女が俺に向き直る。

「オジさん、名前はなんて言うの？」

「教える義理はねぇよ」

数世紀前以上に治安が悪化している今、個人情報の価値は非常に高い。故に、たとえ無邪気に見える少女相手だろうと、気安く名乗る気は無い。

スリ常習犯の餓鬼もいれば、詐欺師紛いの餓鬼も別段珍しくないし。

「なら、私が名乗れば良いよね。それだとフェアだし。……ティルミ・リアクティブ。それが私の名前♪」

ティルミ・リアクティブか。……物騒な名前だな。
と、思った直後――
「おい、スモー!?」
「……焦らなくても大丈夫よ、ファマー。いつもの体調不良だと思うから」
「本当に身体弱いよね……スモーちゃんは」
ボックス席で急病人でも出たようだ。
しかし、いつもの体調不良とは……。
で、スモー？
聴き覚えのある名前だな。
暫し、思案。
（……もしかして、U・K・軍のアイツか？）
心当たりが見つかる。
本名、スモー・ルーディ。
西欧連合国軍、その中のイギリス軍に所属していたMAパイロットだったか。
もはやギャグの領域に達している病弱さで、軍人になれた事自体が謎な人物。
他に、ファマー・エクール……コイツはフランス軍出身で……って、
俺はある事に気付いた。

（ボックス席の奴らは西欧連合国軍第２多国籍機械化歩兵中隊の連中かよ）
アイルランド戦線の連中が何故、中東戦線参加側であるドイツ国内にいる。アイルランド戦線はＵ．Ｓ．Ｏ．との真っ向から殴りあってる筈だ。歩兵は元より、他所に割けるようなＭＡ部隊は無い筈だろうに……。
上層部は無能か？
などと思いながら、出されていた珈琲を啜る。苦ぇ。
「御馳走様～」
「お粗末様でした。……良い食べっぷりだな、嬢ちゃん。……だが、もう少し綺麗に食えよ。……品のねぇ女は嫌われる」
その横では、少女――リアクティブがシュトーレンを完食したらしい。皿のサイズを見れば、おそらく一本丸々腹に収めたらしい。どんな胃袋持ってやがるんだ……というか、
（マスターも何言ってんだよ!?）
軽いナンパに近い発言だった。アンタはロリコンか？それとも、ペドフィリアと言った方がいいか？……ペドフィリアとは、精神異常の一種だが。
「……ヴェイ。一つ言っておく。俺は世辞を言ったに過ぎないぞ」
「……そうかい」

口に出してねぇ筈なのに……何故、バレた？顔に出てたか？
（マスターも侮れねぇな）
接客業、営業の連中は人を見る目がある。……無ければ、仕事が上手くいかないしな。
仮面を被る必要性は高い。
それに比べりゃ、俺のような……軍人、それも下っ端の奴は仮面なんささして必要無い。生物を殺せる精神力さえあれば、最低限の仕事はできる。
……何を考えているんだか。
腹ごしらえは済んだ事だし、基地に戻ろう。
俺は席を立つ。
「マスター、代金は１８₭だったか？」
「あぁ」
財布から紙幣を取り出し、マスターに渡し、店を出る。
「おい１０₭の釣りだ……って、いらねぇのかよ」
なんて声を聴きながら。
オジさんは店を出ていった。
（……名前、教えてくれなかったなぁ）

店の出口辺りを一瞥し、私は内心がっかり。
オジさんの事、わりかし気になっていたのに。
名前が分かれば、調べようは内心幾らかあった。
でも、分かったのはオジさんが西欧連合の軍人だという事だけ。
残念だと思いながら、店内を見回す。
カウンター席は私一人だけ。
ボックス席の方には数人いるんだけど……。
「またか、スモー！」
「何に当たったんだ？」
「……もう、止めようよ」
テーブルに一人の女性が突っ伏していた。
いや、突っ伏して痙攣している。
なんで？
と、首を傾げた矢先に、ポケットに一人の収めていた携帯端末が振動。
端末を取り出し、画面を確認。
「ハァ。もう、かぁ……」
溜息を吐く。

画面にはただ一言、
――二十分後だ
と、表示されていた――

ReportV ～Tri Stand Briefing～

数十分後――第４機械化歩兵中隊ハンガー
「さて、お前ら。唐突だが出撃命令が下った」
基地に戻った俺は、第４機械化歩兵中隊の面々をハンガーに集めていた。
「いきなりかよ。こっちは訓練終わったばかりだってのに」
苦情を述べる、エーデル。
鉄拳制裁でもしてやりたいが、体力の無駄だろう。
「口を慎めよ、エーデル。それで隊長、任務内容は？」
一方で、口が悪い方ではあるアリサは、任務説明を求める。
仕事熱心なのは良い事か。
「そう焦んな、と言いたい所でもねぇから、説明に移るか。……明後日明朝０３：００より東欧連邦国領、旧ベラルーシ、ボルコブイスクの前線基地を強襲。前線を押し上げるそうだ。……で、プランとしては第８、１０、１３戦車中隊と第２１歩兵大隊が正面

から侵攻。それに先んじて第４、５機械化歩兵中隊がＨＡＬＯ降下で先行突入。できる限り基地設備を破壊し撤収。尚、正面からの侵攻組と同時に、第６、７機械化歩兵中隊と第２３歩兵大隊も侵攻。第９重迫撃砲中隊が後方から制圧支援をしてくれる、ともある。……作戦としてはシンプルだが、何か質問はあるか？」

「いいえ」

「無いぜ、隊長」

「Ｎｅｉｎ」

「特に無いです」

「……無いぜ」

全員、異存は無いらしい。

「作戦開始までは自由だが、腕は鈍らせるなよ？……以上だ、解散」

故に、あっさりと通達事項は終わる。

「じゃ、もう一戦やって来るか……」

「僕も復習しておこう」

アリサとコニーは機体へ再搭乗。

口振りからして、トレーニングか。

「……」

リタは……既に機体へ搭乗、操作系の調整作業中。
機体の改良は重要だ。
で、残るは天樹とエーデルか。
と、思いつつ携帯端末を起動。自主課題として押し付けたシュミレータの結果を表示する。
（天樹は……まぁ、こんなものか）
天樹の方は、大方、予想通りの結果。悪くはない。
一方でエーデルは――
（……被撃墜判定、２０。撃墜判定……3。その程度か？）
多少キツめの内容にしておいたのに、この程度とは。口先だけのカスだったようだ。
……ならば、やるべき事は決まっている。
「エーデル、お前もシミュレーター訓練だ。手解きしてやる」
叩き上げだ。
「……チッ、了解した」
俺の意図を察し、嫌そうに了解するエーデルを尻目に、訓練メニューを組み上げる。
難度は昼間に与えたヤツの二倍。
僚機は……有りにしてやるか。

と、組み上げたシミュレーションデータをエーデルの機体に送信した所で、肝心のエーデルも機体への搭乗を終えた。
「クリアするまで、出れないと思えよ?」
『黙れよ』
短いやり取りの後、シミュレーター起動。
エーデルを仮想戦場へと放り込む。
(これで少しはマトモになると良いが……)
小さく溜息。
小隊目下の課題はヤツの練度向上だろう。
「フォルさん」
直後、背後から天樹の声。
「なんだ?」
「お客さんみたいです」
「……お客さん?」
振り返る。
ハンガー入口に、女性兵士の姿。
(……アイツは……第2多国籍機械化歩兵中隊のファマーか?)

何の用だろうか？
疑問に思いつつ、近付く。エーデルの訓練監督中とはいえ、ヤツの事だ、二時間ぐらいはクリアできないだろう。
故に、数分席を外すぐらいは……な。
「何の用だ、ファマー軍曹」
「ちょっとした連絡ですよ、フォールディ中尉」
ファマーは苦笑し、続ける。
「出来れば、今度の作戦で派手に暴れてください。……私は貴方とは違う作戦への参加ですが、幸運を祈りますので！」
要望を。
「……言われなくても、暴れてやるさ」
ならば、返すべきは快諾と、
「紙飛行機共は楽に落とせるが、壁殴りはどうだろうな？」
多少の嫌みだ――

A．C．３０２１　Ｊｕｌｙ．８　Ｐ．Ｍ．４：１５　旧インド洋上
広大な海を、一隻の船舶が航行している。

船舶は多数の砲門と甲板、艦橋を備えた重航空巡洋艦。
その船内、ＭＡ格納庫内では――
「諸君、次の任務が決まったぞ」
一人の巨漢が、十数人の兵士に告げる。
「本当ですか、ヴァーチェノフ中佐」
「次は西欧連中のケツ掘りですか？それならば、自分にやらせてください！」
「いえ、Ｕ．Ｓ．Ｏ．捕虜の拷問が先でしょう。どうやってゲロを吐かせましょう？」
などと、兵士達のやる気は充分なようだ。
巨漢の名はヴォルガン・ヴァーチェノフ。
階級は中佐で、東欧連邦国軍　第９機甲大隊を預かる男。
ヴォルガンは苦笑し、
「仕事熱心なのは良いが、全て違うぞ、諸君」
騒ぐ兵士達を制する。
「今回は旧ウクライナ地区に存在する、我が軍基地の防衛だ。……何でも、そこで新兵器を開発している事が西欧連中にバレたらしく、二日後に同基地の制圧作戦が決行されるとの事で、俺達が呼ばれたらしい。……不安の種は早々に摘み取るのはお互い様だな。……と、いうわけで諸君。自軍の基地を守りつつ、西欧連中を肥溜めにブチ込めば

いい簡単な任務だ。捕虜を取るか否かは諸君に一任しよう。何か質問は？」
「「「「「ありません！」」」」」
「「「「「異議無し！」」」」」
「「「「「理解しました！」」」」」
「「「「「特にありません！」」」」」
……無いらしい。
「諸君の心意気は理解した。解散して構わん」
『Πａ!!』
部下達が一斉に敬礼し、格納庫から出ていく。
数分で人気が失せ、格納庫にいるのはヴォルガンただ一人。
「……さて、手酷く……って程でもねぇが、やられたな」
自分の機体を見上げる。
重装甲の多目的装甲。
その肩部はフレームが剥き出しになっている。
先の戦闘において、肩部装甲内蔵型の多連装ロケットランチャーに被弾し、誘爆によって比較的大きな損傷を負った為だ。
（アイツら……確か、Ｕ．Ｓ．Ｏ．軍　第９独立機械化強襲小隊――ルシファー小隊

だったたか？）

ルシファー――堕天使、か。

過ぎた名だと思える。

ヴォルガンがやりあったあの機体は同小隊の基本戦術から見て、隊長機である事は明確。

隊長があの程度の実力では、タカが知れた部隊。

（……第一、戦場で〝殺したくない〟等、甘ったれた戯れ言ほざく奴には、軍人はおろか、市民面して生きる事自体がおこがましいんだがな……）

殺すな、壊すな、などと奇麗事ばかりほざく奴らは文献だけの戦争に踊らされた道化であり、自らが危機に瀕すれば、やはり奇麗事をほざいて真っ先に逃げる。

そうして、宇宙（ソラ）へ逃げた奴らはまさしくクソ野郎共だ。

ロクな解決策など提示せず、保身に走ったクソ野郎共。

あの機体のパイロットの根本的思想は、ソイツらと同じだろう。

だから、次に会ったら仕留める。

万一捕虜にでもなったのならば、現実を教えた上で嬲り殺しにしてやろう。

奇麗事に現を抜かした自分を呪いながら死ねるように。

と、結論が着いた所で、ヴォルガンの携帯端末が震える。

振動パターンはメール。
即座に開くと――
「……随分と夢見がちな兵器だが、大丈夫なのか？」
それは防衛対象に含まれる、新兵器に関する資料だった――

A．C．３０２１ Ｊｕｌｙ．８ Ｐ．Ｍ．９：２９ Ｕ．Ｓ．Ｏ．領 旧カリフォルニア Ｕ．Ｓ．Ｏ．軍基地内 第９独立機械化強襲小隊ハンガー

「……また、作戦か」
コンテナに腰かけ、携帯端末を開いた中肉中背の男――アルファ・ネクストは溜め息を吐く。
つい数時間前に旧オーストラリアで作戦を遂行し、小隊所属機の殆どが損傷を負い、ロクに修理も済んでいないというのに。
と、思ったものの、よく読めば作戦決行は二日後のようだ。
（……それでも、整備兵達は休み無く働かなければならないだろうな）
また、小言を言われそうだ。
溜息。
ともかく、作戦内容の確認だな。

目的地は――――東欧連邦国領　旧ウクライナ。
（……同地点の東欧連邦国軍基地の制圧？）
アイルランド戦線の前線補給基地の方ではないのか？
明らかに、悪意を感じる作戦内容じゃないか――――ん？
（……なるほど、行きはＨＡＬＯ降下で、帰りは黒海から輸送機、か）
どうやら帰還の手段はあるらしい。
『自分達の腕でどうにかしろ、チャンスは用意してやる』という事か。
酷い上層部だ。
結論が着いた所で、
「隊長！」
「何だよ、この任務は!?」
「落ち着けよ、お前ら……」
「む、無理だと思いますが……」
「……」
ハンガーに小隊メンバー達が入ってきた。
どうやら、任務の抗議か。
（……さて、どうしたものか）

アルファは三度目の溜息を小さく吐き、コンテナから腰を上げ、

（……上層部への抗議、通ると良いがな……）

小隊メンバーの元へと歩き始める。

その後、仲間の抗議を聞いたアルファは上層部に作戦中止を具申したものの、黙殺されたという――

ReportⅥ ～Double Stand Stu rm&Защита～

A．C．3021 July．10　A．M．2：55　東欧連邦領　旧ベラルーシ　ボルコブイスク上空

『バルド隊、作戦開始時刻です』

「了解した」

オペレーターの声に、短く返答。

機体システムを通常モードへと移行。

――System……ReStartiング……Complete

灯る計器。

ディスプレイに映る、暗闇と、小隊各機。

『バルド8、準備完了です』

『バルド9、準備完了……です』

『バルド11、準備完了』

『バルド10、準備。いつでも行けるぜ』
『バルド12、行けるぜ！』
次々と届く、小隊員の無線。
全員、準備は良いらしい。
「よし……。バルド2、よりバルド1へ。第二小隊はこれより降下を開始する」
『了解した、バルド2。こちらはもう少しかかりそうだ。露払いは頼む』
……了解だよ、クソ野郎。
無言で無線遮断。
灰と白の世界へとダイブする。
後続の小隊各機が降下するのを確認しつつも、視線はレーダーとディスプレイへ。
尤も、レーダーは赤く染まっているが。
敵基地上空なのだから当然であり、お出迎えは対空砲（AAC）と地対空ミサイル（SAM）。
「バルド2から砲兵隊へ。支援砲撃を始めてくれ！」
『了解した。既に装填作業には入っている。暫し待て』
「急いでくれよ、対空火器の餌食にゃなりたくねぇ」
軽口を叩く余裕ぐらいはあるから……まだ、大丈夫。
『『『Feuer（発射）!!』』』

数秒を遅れ、無線越しに聴こえる、砲兵の声。
地上に咲く、火炎の花々。
黒やオレンジしか、バリエーションは無いがな。
『『『再装填開始！お客さんを待たせるなよ!!』』』
――高度、３０００。
――警告　対空砲火。直ちに回避してください。
してるさっ!!
制御システムの合成音声に対して、若干苛立ちつつも、ブースタを断続起動。
直撃弾を回避していく。
現状、小隊員の脱落は無い。
全機無事に降下できると良いが――
と、思った矢先、
『フォーゲル３、被弾！被害は……クソッ!!主翼と格納庫！高度維持不可能、並びに輸送対象の全滅を確認。Ｅｎｔｌａｓｔｕｎｇ!!』
（脱出する）
バルドｌを含む、第一小隊が対空砲火の餌食となった。
（何してやがる、あの野郎っ!!）
戦場で道草食ってばかりいたツケが回ってきたか、高学歴だけが取り柄のモヤシ野郎

!!

「バルド2より第二小隊各員へ。第一小隊は全滅した。ほぼ無傷の基地戦力をブン殴る事になるから、気を引き締めていけ。さもなくば、彼の世行きだろうから」

――高度、８００

――警告　対空砲火、増大。直ちに回避してください。

味方の返答に重なる、警告。

鬱陶しい。

砲兵や前線部隊は仕事してんのか？

悪態を吐きつつ、ブースターの制御とレーダーに集中。

――高度、３００。

そろそろだな。

「地上が近いぞ。着地も考えろよ」

『分かってるよ、オッサン』

『戯れ言ほざく口は閉じな、バルド１２。死にたいなら、構わねぇけどよ』

『……高度、１５０』

『対空砲火、更に拡大しています。皆さん、注意してください』

返答は様々だが、バルド１２は相変わらず口が悪い。

――高度、１００。
ブースタを垂直噴射。
落下速度を緩め、火器管制システム起動。
左手が握るトリガーユニット付きスティックを操作。
連動する左腕武装である１５０㎜半自動散弾砲《ＥＡ　ＡＳ０４―Ａ》。
手近な対空砲と地対空ミサイルランチャーをロック。
躊躇わず、フォイア。
吐き出された圧縮マテリアル弾頭の雨は標的を捉え、破壊する。
通常、散弾は装甲目標等のハードターゲット相手には向かないが、それは従来の散弾が鉛、或いは鉄製の球形弾であった為だ。
まぁ、現行の散弾でも、圧縮マテリアルの強度と質量で押し潰しているに過ぎず、戦車や重装ＭＡには効果が薄いのだが。
――高度、５……着地。
――脚部バランサーチェック……問題なし。スタビライザーチェック……問題なし。
「攻勢に出るぞ！前線部隊の分も食ってやれ!!」
『『Ｊａ！』』
『Ｊａｗｏｈｌ』

『『ヒャッハー！開戦だぁ!!』』
こうして、俺達の攻勢は始まった。

同時刻、東欧連邦領　旧ベラルーシ　ボルコブイスク地上――
『バルド隊が降下した。俺達も行くぞ。ヴァント隊各員準備はいいな？』
『『『Ｊａｗｏｈｌ!!』』』
反響する味方の声に顔をしかめつつも、俺――カール・クリストフ一等兵――は手にした６．５㎜突撃銃《ＣＥＩ　ＡＧ８５》の安全装置を外す。
『Ｇｅｈｅｎ（行け）！Ｇｅｈｅｎ（行け）！Ｇｅｈｅｎ（行け）!!』
そして、東欧連邦の前線基地へと侵攻開始。
既に幾つかの歩兵部隊が先行。
ＭＡ《ノート》も交戦中。３５㎜突撃砲が喧しく騒ぎ、大量の空薬莢が弾き飛ぶ。
何人かの兵士が頭上から降る空薬莢によって、死傷。意味を持たない血肉に変わっていた。
上空、後方、正面からのＭＡ投入。
長距離からの榴弾砲。
ＭＡ随伴の主力戦車と歩兵部隊。

敵基地は多方向からの膨大な戦力に自戦力を割く事を迫られる為、こちらにとっては、多少やり易くなるはずだ。
犬死にする気は更々無いが、俺達も急がなければ。戦績が減っちまう。
先行していた主力戦車の背後に回り、前方を伺う。
（……基地正面にはバリケードと簡易トーチカ。それに、主力戦車数台か）
あまり分散していないな。少しは潰しておけよ、砲兵の奴ら……。
《ＡＧ８５》をスリングで肩へ。
代わりに、背負っていた１２０㎜対戦車擲弾筒《ＥＥＩ　ＰｚＲ―７９》を手に持つ。
弾薬はさほど持っているわけじゃない。
補給兵とは距離がある。
だが、トーチカや主力戦車を吹っ飛ばすには工兵の爆薬、砲兵による支援砲撃もしくは、携行型の対戦車擲弾等が必要。……ＭＡによる上部装甲狙い、という点もあるが――
《ノート》の一機が胸部に大穴を穿ち、転倒。周辺にいた友軍歩兵が圧死する。
残骸の周囲に広がる、血の池。
（なりふり構ってられねぇ!!）
トーチカからと思われる重機関銃の弾幕が止んだ所で、身を乗り出し、《ＰｚＲ―７

9》をトーチカに向けて発射。
軽い反動と共に、白煙を引いて飛ぶロケット推進式擲弾。
主力戦車の砲口が俺の方に向く。
擲弾がトーチカを破壊する様を確認せず、掩体としていた主力戦車から離れる。
「うおぁっ!?」
直後、背後で爆発。
主力戦車が破壊され、弾薬は誘爆。
吹き飛ばされた俺は、
「ごふぅっ!?」
朽ちかけたコンクリート壁に背中を打ち付けた。
「大丈夫か?」
助け起こそうと、友軍兵士の一人が近付いてきた刹那――
ソイツが鮮血と共に吹き飛んだ。
「クソッ!主力戦車の増援だ!!対戦車擲弾(PzR)!誰かＰｚＲを撃――ぐあぁっ!?」
布を引き裂くような音と、苦痛に呻く友軍。
主砲同軸機関銃と、対空／対人機関砲が唸りを上げて、外敵を蹂躙している。
だが、朽ちかけたコンクリート壁や塀が掩体となり、敵は俺を捕捉していないようだ。

（やらなきゃ、進めねぇし……じっとしても遠からず、死ぬ）
なら、足掻くだけだ。
握り締めて放さなかった《ＰｚＲ―７９》に予備弾頭を装填。
掩体から顔を出し――即座にトリガーを引く。
そして走る。
爆発音と、機銃の唸り。
止まれば死ぬ。
規則的に走っても死ぬ。
（クソッタレ！）
一両はやったはずだ。その前に、数両を友軍が破壊している筈。
でも、砲火は衰えていない。
既に、友軍主力戦車は破壊されつくし、ＭＡも半数が大破炎上。基地正面が開けた平地であるが故に、正面きっての対戦車戦となり、ＭＡは体の良い的にしかならない。
元よりＭＡは強襲、奇襲用の特化型兵器だ。
（戦況最悪じゃねぇか!!）
友軍歩兵も、掩体に雪隠詰め。
下手に顔を出した奴からミンチに変わっていく。

なんとか別の掩体に隠れた俺は、《ＰｚＲ―７９》をリロード。
予備弾薬はもう無い。
補給兵は……クソッ！弾薬持ったまま、路上のど真ん中でくたばってやがる!!
「ヴァント２４からヴァント隊へ。何人生き残ってる？」
無線で味方の数を確認するが、聴こえるのは、耳障りな雑音。
「おい、聴いてんのか！繰り返す！ヴァント２４からヴァント隊へ。何人生き残ってるやがる！」
されど、聴こえるのは雑音だけ。
「クソッ！」
俺以外、全員逝きやがった!!
「クソッ！クソッ!!」
砲兵仕事しろよっ!!
砲兵を呪いながら、様子を伺い――
数分後に機銃の唸りが止まる。
（よしっ！弾薬が切れたっ!!）
掩体から半身を出し、主力戦車の横っ面に向けて《ＰｚＲ―７９》を発射。
友軍も同調するように、《ＰｚＲ―７９》を撃つ。

次々と着弾するＨＥＡＴ弾だが、半数は正面装甲への着弾であり、撃破には至らない。
とはいえ、側面に着弾した物が確実に損害を与え、数両が撃破される。
残りは――二両。
「後は二両だけだ、畳み掛けろ!!」
「弾は……わりぃな貰ってくぜ！」
再び攻勢に転じた友軍が味方の死体から《ＰｚＲ―７９》の予備弾薬を奪い、残る主力戦車を撃破していく。
俺も同調し、補給兵の死体から１２０㎜擲弾を拝借。
《ＡＧ８５》に持ち替え、走る。
眼前に動いている装甲目標は無い。
いるのは、数分隊程度の歩兵。
小銃の弾薬はたっぷりある。
まずは、撃破された主力戦車の裏へ。
隙を伺い……顔を出す。
素早く狙いを定め、指切りによる点射。
胴体の致命部位を撃ち抜き、無力化。
隠れる。

すると、軽い音を立てて転がった手榴弾。
掩体の向こうに投げ返す。
爆発音。
苦痛に呻く声。
数人殺ったか？
掩体越しでは分かりづらい。
「正面ゲート制圧！内部の制圧に移るぞ、Ｇｅｈｅｎ！Ｇｅｈｅｎ!!」
「「「「Ｊａ!!」」」」」
波に乗るように、俺も掩体から出て、正面ゲートを抜ける。
すると、黒煙を上げる崩壊した格納庫と、撃破された東欧連邦製ＭＡ。そして、機動格闘戦中のＭＡ――バルド隊――の姿。
『ヒンメルより残存歩兵部隊へ。歩兵部隊は司令部の制圧を行え』
「了解。各自、無線周波数を共用に変えろ！」
指示通り、無線周波数を共用の周波数へ。
基地内部に敵歩兵の姿はほぼ見えない。
前線に出張ったのか、重要施設の死守に回っているのか。
後者の可能性がやや高いか？

気を引き締めないとな。
俺達は司令部と思われる建物に近付く……前に、
『窓を撃てっ！』
正面から見える窓と言う窓に向けて、６．５㎜ライフル弾を叩き込む。
待ち構えるならば、狙撃を行ってくる可能性も高いから。
「Ｇｒａｎａｔｅ！」
更には、突撃銃の銃身下部に取り付けられた擲弾射出器（グラナーテ・ヴェルファー）も使われた。
『突入するぞ！』
窓周辺を破壊した後、先行する兵士が扉のノブを斜め上方向から散弾銃で射撃。
閂を破壊し、蹴破る。
直後、同兵士は鮮血を撒き散らして絶命。
待ち伏せされていたか。
俺は腰に提げていた手榴弾を掴み、ピンを抜く。
二秒間持ち続け、室内に投擲。
爆発。
「Ｇｅｈｅｎ！Ｇｅｈｅｎ！」
雪崩れ込むように、突入。

「ぐあぁっ!?」
機関砲の掃射音と悲鳴。
舞い散る肉片と鮮血。
流れ弾でノロマ共が逝きやがった。
司令部内も地獄なら、外も地獄だ。歩兵が殺れるＭＡは準戦闘体勢か、砲撃姿勢中等の無防備な状態に限られる。
余程の腕が無ければ、対戦車擲弾筒をブチ込めないからだ。走行中の高機動車を弾速に劣るロケット砲で破壊する事が難しいように。
鮮血と煤に染め上げられた室内を走り、階段を駆け上がる。
その背後で鉄製のテーブルが蹴り倒され、
『俺達はここで外を警戒する』
数人の友軍がテーブルを盾に、外を睨む。
気にせず、上階へ。
やはりと言うべきか、敵兵の待ち伏せ。
苛烈な銃火を手榴弾で黙らせ、突発的に現れる奴は６．５㎜ライフル弾で射殺していき、
「Ｈａｌｔ(動く な)!!」

司令室に雪崩れ込む。
しかし、そこは蛻の殻。
「どういう事だ？」
と、思った矢先――強烈な爆発が俺達を襲った。

Ａ．Ｃ．３０２１　Ｊｕｌｙ．１０　Ｆｒｉ　Ａ．Ｍ．４：２１　東欧連邦領　旧ベラルーシ　ボルコブイスク近郊
「目標破壊」
無骨で狭いコクピットの中で、男性――エヴォギニー・ヴィッツ少佐――は呟く。
ヘルメットに付属するディスプレイ（HMD）の中央には、黒煙を上げる建物。
「アホートニク１から各員へ。我らが基地に土足で踏み入った温室育ち共を地獄に叩き落とせ。俺が援護する」
『『『『了解！！』』』』
視界の中で、動き出す１１機の無骨な多目的装甲。
その姿を一瞥し、ヴィッツは手元にあるスティックを握り直す。
ＨＭＤに、上部を欠いたＴ字上の照準線が現れる。
選択中の武装は３２０㎜汎用大型砲。

弾種、ＣＭＢ―ＡＰＦＳＤＳ。（装弾筒付翼安定圧縮マテリアル徹甲弾）
基地内で動き回る一機のＭＡに狙いを定め――トリガーを引く。
轟音。
数秒後に、同ＭＡが胴体に大穴を開けて、倒れ伏す。
『ボリス隊、敵ＭＡ部隊と交戦開始』
『グレゴリー隊、敵砲兵部隊と交戦開始』
「了解した。援護が必要ならば言え」
部下の状況方向に答え、再び別のＭＡを狙う。
次は――汎用大型砲持ちだな。
周囲を警戒している一機の重装ＭＡに照準を合わせる。
発射。
しかし、同時にＭＡがブースタを吹かし、サイドステップ。
射出した３２０㎜ＣＭＢ―ＡＰＦＳＤＳはコンクリートに大穴を穿っただけだ。
（もう位置が割れてるな……移動するか）
操縦棍とフットペダルを操作。
移動を開始する。
向こうとの比嘉の距離は１０㎞近くあるが、すぐに追い付かれるだろう。

（最悪、近接戦闘も考えないと駄目だな……）
この機体では、厳しいだろうが。
元いた地点から５ｋｍほど移動。
砲撃姿勢へ移行。
各脚部アンカー展開。
広域指向性レーダー起動。
長距離砲撃火器官制システム、起動。
操縦棍を握り直す。
再び、ＨＭＤに映る照準線。
今度は基地正面ゲート前を確認。
数機のＭＡが侵攻中。
照準修正。
発射。
破壊。
再装填作業中に照準を修正。
作業完了と同時に、トリガーを引く。
破壊。

残りは三機。
マガジン内のＣＭＢ―ＡＰＦＳＤＳは６発。
残弾は充分……とは言い難いな。
残マガジン数的にも、余裕は無い。
『グレゴリー　リーダよりアホートニク１へ。敵砲兵部隊を殲滅。ボリス隊の援護に回ります』
「待て。ボリス隊、現状は？」
急ぎ過ぎては行けない。
『敵は風前の灯火だ。援護は必要無い。グレゴリー隊は基地奪還を頼む』
『……グレゴリー　リーダ、了解。支援砲撃を頼みます』
「了解した。正面ゲートの敵ＭＡを優先的に破壊しろ」
指示を出しつつ、操縦棍とペダルの操作。
旋回し、基地内に居座るＭＡ小隊を視界に収め、
（さぁ、狩りの続きだ）
砲撃姿勢への移行状況を確認しながら、ヴィッツは敵を見据えた――

ReportⅦ ～The Angels Die～

A．C．3021　July．10　A．M．8：35　東欧連邦領　旧ウクライナ
ウマニ陸軍基地内
「これで全部か……」
硝煙と黒煙が立ち昇る広場には、数十機の多目的装甲の残骸が散らばっている。
その全てが、東欧連邦の機体。
「ルシファー1より各機へ。……ブツは見つかったか？」
部下に指示を出す。
俺達の目的は、試作機の破壊。
詳しい事は知らないが、局地戦用の大型兵器であり、既存の兵器では対処が困難らしい。
（……そんな兵器を作らせてたまるかよ）
学生時代の座学では、今起こっている三つ巴の戦争の根本的原因は、東欧連邦の国際法を逸脱した侵略行為に対するU．S．Oの制裁が発端と教えられた。

太古の昔から、俺達と東欧連邦はいがみ合っていた。
一時期は〝冷戦〟と言われていたが……その頃の方は悲惨だったらしい。
他国を唆(そそのか)し、争わせる。即ち、〝代理戦争〟が頻発したから。
（今はそんな事が無い分、多少はマシということか？）
有り得ないな。……戦争は何時だって、悪しき行いだ。
『ルシファー2より各機へ。増援確認。西欧機体、おそらく〝ブラウンベス〟が6機』
ブラウン・ベスか……。
かつての女王の名を冠した、欠陥機。
格闘性能に重きを置いた性能だった筈。
計器確認。
残弾、推進用マージ・マテリアル(M)は充分。
「確認した。ルシファー6以外は応戦しろ。だが、弾薬は浪費するなよ」
『『『『Ｙｅｓ，ｓｉｒ』』』』
部下達の了承を聴きつつ、旋回。
その瞬間、
『機体温度上――!?』
ルシファー5の正面装甲が融解。

続けて飛来した砲弾が、コクピットブロックを破壊。
ルシファー５が戦死した。
「クソッ！各機、注意して臨め！」
マージ・ブースタ起動。
レーダー確認。
怪しいのは――そこか！
ルシファー５の残骸から程近い裏路地に移動。
案の定、そこには曲面装甲を多用とした、中世の騎士に似たＭＡの姿。
数は二。
ブースタを吹かせたまま、水平移動。
過去位置を抉る砲弾。
照準修正。
右腕の４０㎜突撃砲《ＷＡ　ＡＣ１０―Ｄ》を速射。
狙いは腕部装甲の継目。
何割かが、狙い通りに着弾し、敵機の腕部を破壊。
背部に予備の武装は無い。
一機、無力化。

残る一機も同様の手順で無力化し、
『ルシファー3、敵機撃破』
『ルシファー4、敵機撃破』
『ルシファー2、敵機撃破。敵対勢力の全滅を確認した』
部下達の報告が続く。
殲滅完了。
『隊長、また無力化するだけかよぉ……』
『殺しとかなきゃ、また来るぜ？』
後は、いつも通りの戦い方への不満。
言わんとする事は理解しているさ。俺もアイツらも……お互いにな。
「だとしても、俺は血で汚れる気は無い。……ルシファー6、試作機の位置は割り出せたか？」
『ええ。地下です。ゲートロックも解除出来ま――クソッ！』
報告の最後に悪態。
「どうした？」
『試作機の起動を確認。こちらに向かってきます！』
「了解した。出現予想地点は分かるか？」

『勿論。送信します』
「……確認した。各機、迎撃準備だ」
起動されちまったならば、面倒だ。
なにせ、試作機のデータは無い。
慎重に行かないとな……。
『ったく。破壊目標が起動って……漫画じゃあるまいし』
『無駄口を叩くな、ルシファー3。死亡フラグだぞ』
『死亡フラグねぇ……。俺、基地に恋人がいるんだ――とか、言えば良いのか？』
……コイツら。
（まぁ、軽口を叩ける程度に、落ち着いているのか……はたまた、緊張しているのか）
どちらにしても、時間は待ってくれない。
徐々に大きくなる、駆動音がそれを証明している。
鮮明に聴こえる事から、時間的余裕は無い。
「無駄話はそこまでだ。各自、構えろ」
『『『了解』』』
指示を出しつつ、全武装の最終チェック。
４０㎜突撃砲――残弾７割。

３００㎜ロケットランチャー――残弾、３。
背部１８０㎜ミサイルランチャー――残弾、６。
近接格闘兵装、損耗無し。
確認終了。
と、同時に――背筋に悪寒が走り、俺は反射的にブースタを吹かし、サイドステップ。
直後、元いた位置の地面が赤熱化した。
（あぶねぇ……一歩遅かったら、戦死だな）
安堵しつつも、視線を出現予測地点へ。
音が消える。
そして、再び響く。
重い扉が開く音ではなく、破壊され、吹き飛ぶ音が。
蔓延する土煙。
出てくるのはどんな機体だ？
奇襲を警戒しつつ、土煙を睨む事暫し。
破壊目標が現れる。
太い４本の脚を持つ、昆虫然とした機体。
背部からは羽のように多数のコンテナが突き出し、前面にも多数の武装が確認でき

る。

全体的に、蝶と何かを掛け合わせたような雰囲気の機体。

こんなのが破壊目――

砲声。

ルシファー3の突撃砲か。

『隊長！様子見は撃ちながらにしてくれ！』

『そうですよ。コイツを潰せば任務完了ですよ！』

ルシファー4も攻撃を開始。

二機が速射する35㎜CMB圧縮マテリアル徹甲弾APが破壊目標たる機体――仮称、バタフライに迫る。

防御性能を図るには充分か、と思ったのも束の間。

『ぐあっ!?』

接近しつつ、攻撃を続けていたルシファー3の正面装甲が大きく抉れ、通信断絶。

……撃墜された。

バタフライが武装を使用したようには見えない。

「何が起こった？」

『分かりませんが、対象は無傷ですよ』

「……本当だな」
確認すれば、無傷で居座っている。
バタフライには突撃砲程度では効かない、と？
「ルシファー2、支援砲撃は――」
『ルシファー3、4の攻撃に合わせて行っている。……結果は見ての通り』
90㎜多目的狙撃砲も駄目、か。
ロケットランチャーとミサイルにかけるしか――
――CAUTION
警告音。
バタフライ背部から、多数のミサイルが撃ち出される。
《WA AC10―D》を用いて、ミサイルを迎撃しつつ、ブースタ移動。
全てのミサイルを迎撃した所で、一気に距離を詰め――左腕の《WA RK05―C》を一回発射。
続けて、ブースタを前面に吹かし、急速後退しつつ、効果を窺うが――炸裂した様子が無い。
代わりに、俺の周囲が抉れていた。
（……攻防一体のバリア、みたいなものか？）

飛来する砲弾を無効化し、何かしらの手段で反撃する機構。
ルシファー3を殺し、俺やルシファー2の攻撃を尽く無効化しているのは、おそらくそんな武装。
ロケット弾が駄目ならば、ミサイルは……絶対に効果が無いだろう。
……上層部が破壊指示を出したのも頷ける。
コイツは脅威だ。現状の装備では、太刀打ちできないかもしれない。
（どうする？）
考えろ。
バタフライを撃破する方法を。
闇雲に撃った所で、掠り傷すら与えられない。
近接格闘戦に持ち込もうにも、その前に機関砲やらで蜂の巣になるのがオチ。
どうにか、損害を与える手段を探さないと――思考中断。
ブースタ起動。
サイドステップ。
しかし、機体を激しい衝撃が襲う。
――右腕に深刻な損壊発生。稼働不能。
モニターを確認すれば、右肩から下が無くなっていた。

『ルシファー1、蒼白い光条が確認できた。……恐らく、電磁投射砲』
即座に、ルシファー2が原因を教えてくれた。
電磁投射砲――。
亜光速の砲撃。
発射されてからでは、避けようのない攻撃――。
ますます、打つ手が潰えていく。
装填弾数の少ない武装しか無く、いずれもバリアを突き破るには至らない。
『クソッ！クソッ！なんで当たらねぇんだ！』
悪態を吐きつつ、突撃砲を撃ち続けるルシファー4。
彼の機体の周囲は抉れ、バタフライは無傷のまま。
バリアが減衰した様子は一切無いようだ。
――ＣＡＵＴＩＯＮ
警告音を聴き、回避機動。
機体を掠めていく、蒼白い光条。
当たれば即死の砲撃に、胆が冷える。
『……どうするの？』
「今考えている。……が、対抗策が思い付かねぇ」

バリア自体が、どういう原理か――ん？
（攻撃が無効化されると共に、周囲が抉れる……。反射しているわけじゃないよな？）
それなら、成形炸薬弾による爆発がある。
つまり、攻撃自体を実体弾として、跳ね返しているわけだから――
もしかしたら……。
「ルシファー2。奴は、霧状の荷電マージをぶちまけているのかもしれない」
『……なるほど。つまり、反撃の正体は、マテリアル？』
「そういう事だろうな。……しかし、そうなると物質的攻撃手段は一切が無効だ。……状況は好転しない」
『……そうでもない。賭けになるけれど、方法はある』
「方法？」
『ブラウン・ベスの主兵装に、熱線銃があった筈。熱エネルギーならば、マージと結合しない』
……そうか。
マージが結合するのは、飽くまで物質だ。
熱線――熱エネルギーならば、貫通可能か。
『……でも、東欧製のＭＡは重装甲が基本。至近距離から照射しなければ、破壊できな

い可能性が高い』
「……やるしか、無さそうだな」
左腕の《ＲＫ０５―Ｃ》を背部のマワントへセットし、後退。
ブラウン・ベスの残骸へと近寄り、件の熱線銃と思われる、長砲身の武装を取得。
兵装マッチング開始。
……完了。
モニターの兵装情報が更新。
――ＲＦ　ＨＳＣ００　１５５㎜Ｔｈｅｒｍａｌ　Ｃａｎｎｏｎ――Ｌｉｍｉｔ：２０ｓ／５ｓ
僅か２０秒しか、照射時間が残されていない。
が、右腕は損壊している以上、二挺保持は不可能。
俺以外の機体で、通常腕のＭＡ使用者は、ルシファー２だけだ。
「ルシファー２。止めは任せる。……残りは、援護だ」
『了解』
『了解』
部下達の応答を尻目に、ブースタ再起動。
突貫する。

――ＣＡＵＴＩＯＮ
軌道修正。
擦過する砲弾。
――ＣＡＵＴＩＯＮ
撒き散らされるミサイル。
再加速。
――ＣＡＵＴＩＯＮ
ブースタの使用限界を伝える警戒音。
そんな事は分かっているんだ。
でも、バタフライを破壊するには、これしかねぇ！
残りは１００ｍ。
《ＨＳＣ００》を構え、放射準備。
残り７０ｍ。
後少し――というところで、砲身が分解され始める。
「効果範囲内か！」
トリガーを絞り、放射開始。
狙いは、バタフライの胸部。

もっとも装甲厚は厚いだろうが、薙ぎ払っていては、焼き切る前に、俺がマテリアルになっちまう。
現に、乗機の装甲材が３割程度、分解されちまっている。
赤熱化したバタフライの胸部。
僅かに溶解した装甲から覗く、灰色。内装系だな。
それも、纏めて焼く。
まだか？
装甲の分解が止まらない。
数秒後には、衝突するであろう軌道。
駄目押しが必要か！
《ＨＳＣ００》をバタフライに突き立て、放棄。
続けてナイフを抜き、覗く内装へと突き立てる。
いつの間にか、止まった装甲の分解。
パイロットが死んだか？
なら、好都合。
防御機構が潰せりゃ、後はただのデカブツ。
『離れて』

ルシファー2も察したのだろう。
後退。
すぐさま飛来する砲弾が、バタフライを破壊していく。
相変わらずの精密砲撃。
解体作業は、わりかしすんなり済むだろう。
（……悪夢のような兵器だったな）
荷電マージを放出する機構……。
東欧がこんな技術を持っていたとは――――
――ＣＡＵＴＩＯＮ
警戒音。
――敵機内部にて、熱量増大中。自爆プログラムと思われます。
「クソッ！各機、後退しろ!!」
自爆って事は、マージジェネレータの暴走。
ＭＡ用のジェネレータでさえ、最低出力で半径２００ｍ程度を吹き飛ばすから、デカブツともなれば、１０００ｍ位かもしれない。
指示と同時に、ブースタ起動――
――Ｓｔａｌｌ．　ｍａｔｅｒｉａｌ　ｅｍｐｔｙ

――出来なかった。バタフライ相手に、使い過ぎた。
（まだだ。ジェネレータを駆動させ、マテリアル精製――）
次策に移るも、時既に遅し。
――Ｃａｕｔｉｏｎ
警戒音が聴こえた直後、俺は光に包まれた――